

まる博ジャーナル

2022 Vol.2

祝 開館

交流・活動の拠点として歩み始める。

特集 祝開館 交流館の活動レポート

教えてシェリー

- ・サケってどんな魚？
- ・どんぐりの見分け方

博物館長と歩く植物観察会 ～身近な植物図鑑を作ろう～

古墳時代の石材調査 小さな石の故郷を求めて

ヤブツルアズキ採取の記

まる博講演録 歴史と未来の交流館開館記念講演会

- ・彫刻家山崎猛と東海村
- ・民俗学者藤田稔と東海村
- ・昆虫研究者廣瀬誠と東海村

速報 東海村について自由研究をした中学生 快挙！

まる博研究員レポート

とうかいまるごと博物館の協力団体を紹介します

令和3年7月24日、ついに、
東海村誕生以来初めてとなる
博物館施設「歴史と未来の交流館」がオープン。



令和3年度博物館・文化財担当のゆかいな仲間達

歴史と未来の交流館は、活動を通して東海村の郷土を次世代へ伝えていくということが大きな柱となっており、その取り組みの根幹となる事業が東海村全体をまるごと博物館空間と捉えて活動する「とうかいまるごと博物館事業」です。

このまる博ジャーナルは、とうかいまるごと博物館事業の活動記録及び本村の歴史・自然に関する情報発信の媒体として発行するものです。

Vol.2は令和3年度の活動記録の他、講演会や調査速報など盛りだくさんの内容になっています。ぜひ楽しんで読んでいただければ幸いです。

生涯学習課 令和4年3月31日

まる博ジャーナル

2022 vol.2

contents

- 04 特集 祝 開館 交流館の活動レポート
- 14 教えてシェリー
 - ・サケってどんな魚？
 - ・どんぐりの見分け方
- 16 博物館長と歩く植物観察会 ～身近な植物図鑑を作ろう～
- 21 古墳時代の石材調査 小さな石の故郷を求めて
- 26 ヤブツルアズキ採取の記
- 28 まる博講演録 歴史と未来の交流館開館記念講演会
 - ・彫刻家山崎猛と東海村
 - ・民俗学者藤田稔と東海村
 - ・昆虫研究者廣瀬誠と東海村
- 46 速報 東海村について自由研究をした中学生 快挙!
- 48 まる博研究員レポート
- 52 各種イベント・展示、まる博実績一覧
- 54 どうかいまるごと博物館の協力団体を紹介します

特集

祝開館 交流館の 活動レポート

夏

7月~8月

July-August
MARUHAKU JOURNAL

企画展示

7月24日
歴史と未来の交流館がついにオープン！
ここからがスタートです！
今回は交流館の展示・活動の一部を
紹介します。



▲開館テープカット



▲まる博マルシェ開催中

【会 期】 令和3年7月24日~10月31日
【場 所】 歴史と未来の交流館 企画展示室
【展示制作】 梅津信幸 氏

同時開催

東海村未来ポスト

「〇〇年後の物語」

「東海村未来ポスト」に

未来の絵を投函すると、

時空マップに自分が描い

た絵が出てきます！



歴史と未来の交流館オープニング特別企画展

『東海村時空マップ』時の旅人』

東海村の地図に乗ると、ハイスピードで
村内を回った後、その場所の昔の写真や未来の
絵が出てきます。時空マップにのって、現在から
過去、そして未来を旅する展示です。

夏
7月～8月

July-August
MARUHAKU JOURNAL

まる博マルシェ

【開催日】 7/31(土)、8/4(水)、8/5(木)、8/7(土)、
8/9(月)、8/12(木)、8/14(土)
【時間】 10時～11時、14時～15時
【場所】 歴史と未来の交流館 展示室1
【参加者数】 約1,800人

この埴輪って
何でしょう？

古代ロマン！ 埴輪クイズ

東海村の古墳から発見された
埴輪のクイズ。本物の埴輪に
触っちゃいました。



サギわらいで 遊ぼう

サギで福笑い。
遊びながらサギに
詳しくなっちゃいます。



サギは
何種類いるか
知ってる？

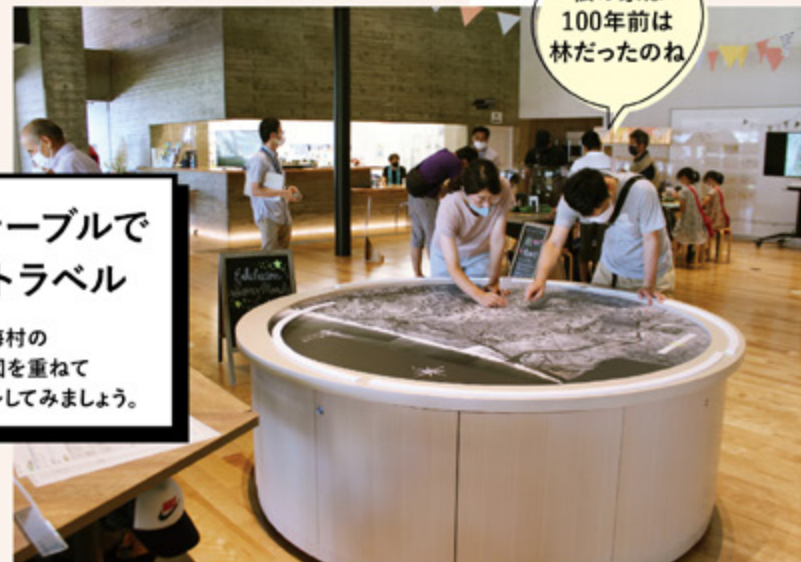
縄文ストラップ づくり

縄文土器の文様を入れた
オリジナルストラップを
作ります。



まる博テーブルで タイムトラベル

東海村の
昔の地図を重ねて
タイムトラベルしてみましょう。



私の家は
100年前は
林だったのね

できあがり！



展覧STORYマラシH

展示にゆなんだ
イベントや体験を
行いました。

秋
9月～11月

September-November
MARUHAKU JOURNAL
まる博マルシェ

収穫祭

金色にかがやく 田んぼ

～稲刈りの季節～

現在はコンバインで稲の「刈り取り」「脱穀」「選別」を行います。かつてはこれらの作業を手作業で行っていました。昭和の半ば、まだ土地改良事業が行われる前の田んぼには深い田んぼがあり、入ると腰まで埋まってしまふような田んぼもありました。そのようなところでは、田下駄を使って田んぼに入っ



おだ掛け — 太陽の恵み —

現在も田んぼを見ると時折稲が干されているのを見かけます。

これは「おだ掛け」といいます。刈り取った稲に太陽の光を当てて天日干しをしているのです。

現在は乾燥も機械化されていますが、おだ掛けだけは昔ながらのやり方で行っている農家もあります。太陽の光で天日干しをした方がお米がおいしくなるという研究成果もあるそうです。



細浦でのおだ掛け(R1)

脱穀

乾燥させたら、稲穂からお米を取り出す作業「脱穀」を行います。

大正10年頃まで千歯扱きせんばこを使って脱穀していましたが、その後はガーコンと呼ばれる足踏み式の脱穀機で脱穀するようになりました。脱穀したお米はまだ稲穂のゴミが付いたままなので唐箕等で選別します。その後、「スルス」という臼うすを使ってもみ殻を取り除き、また唐箕できれいにします。

かつて唐箕はこの農家にもあり、子どもたちの遊び道具としても親しまれていました。

秋
9月～11月

September-November
MARUHAKU JOURNAL

とうかいまるごと
博物館

【会 期】 令和3年10月10日(日)
【時 間】 14時～15時
【場 所】 歴史と未来の交流館 広場
【参加者数】 17名



けっこう力が
必要なのね!

脱穀体験

交流館の広場で
「おだ掛け」していた
稲を千歯扱きやガーコンを
使って脱穀しました。



一つもモノを無駄にしない

先人たちの知恵

脱穀後の稲穂をワラと呼び、捨てることはしません。ワラを使って、わらじや俵、むしろを編みました。また縄をもじってその縄を次の年に使用していました。ワラの細かいものは、牛や馬の餌にして、牛や馬の糞とワラを混ぜたものを肥料にしてまた田んぼに撒いていました。モノがない時代は、一つも無駄にすることが無いようにワラも大切に使ったのです。



【展示物一覧】

(農機具・生活用具)

・ 田下駄・ 田舟・ 背負子・ 千歯扱き

・ ガーコン・ 唐箕・ 俵編み機・ わらじ編み機

(漁具)

・ イグリ舟 ・ アカトリ

まるはく マルシェ

しゅう
収

かく
穫

さい
祭



古からの伝統漁 久慈川のサケ漁

9月後半～10月後半の1か月間、久慈川ではサケ漁がおこなわれます。

現在行われているのは「流し刺し網漁」と呼ばれている漁法です。ボンデンと呼ばれる浮き子を浮かべ、ボンデンと船の間に刺し網を張って流れに沿って船を漂わせます。そうすると登ってきたサケが網に引っかかるという仕組みの漁です。

現在はモーター付きの船を使用していますが、かつてはイグリ舟という木造船を使用していました。展示しているのは実際に亀下地区で使用していたイグリ舟です。

久慈川でのサケ漁はいつ頃から始まったのかは定かではありません。

しかし中世の時代に石神城のお殿様が佐竹氏のお殿様にサケを送ったという記録があるので、もしかしたら中世には久慈川でサケ漁を行っていたのかもしれない。

また、サケ漁は久慈川で行われていますが、そこにはいくつかに分かれた漁域が決められており、それぞれの区域でサケをとる時期と区域が決められています。なぜならば下流の人がサケを全部取ってしまったら上流の人はとれなくなってしまうからです。そのため、そのルールに従って鑑札けんさつを持っている方々がサケ漁をしているのです。



図1 サケ漁区域(水辺のムラ研究会『久慈川と共に生きる人々』より引用)

冬
12月～2月

December-February
MARUHAKU JOURNAL

企画展示

【会 期】 令和3年12月～令和4年3月
【場 所】 歴史と未来の交流館 企画展示室

冬の暮らしの今昔



照沼家住宅主屋(国登録有形文化財)

寒い冬がやってきました。
東海村ではあまり大雪は降りませんが、冬の寒さは厳しく、雨が降った次の日には地面は凍り、冷たい北風が体に刺さるように感じます。
さて、冬の家の中をのぞいてみましょう。
この展示では高度経済成長期に入る前の昭和前半頃の東海村のとある家の一場面を再現しました。
現在、みなさんはどのように寒さをしのいでいますか？
コタツや暖房、ホットカーペット…私達の家には色々な道具がありますね。
今も昔も冬が寒いのは変わりませんが、寒さをしのぐ道具たちはどのように変化をしているのでしょうか。

土間(どま) — 多目的スペース

台所(でえどころ)とも呼び、お風呂場、馬小屋、キッチン、作業場など様々に使い分けがされています。時には作業場、時には荷物置き場、時にはキッチンなど多目的に活用される便利なスペースです。

現在は電気やガスを使ったコンロがあるキッチン(台所)が多いと思いますが、電気やガスが普及する前は、カマド(ヘツイ)で煮炊きをしていました。羽釜ではご飯を炊いて、鉄鍋ではみそ汁などを作っていました。

囲炉裏(いろり)

囲炉裏は、「照明」・「炊事」・「暖房」の3つの機能を併せ持っていました。

当時の家は木でつくられており、屋根は茅葺きや藁葺きです。そのため、囲炉裏から上がる煙によっていぶされて、乾燥し建物が維持されると同時に防虫効果もあったのです。また、囲炉裏の上は特に乾燥するので、「ベンケイ」に川魚などを刺しておくことで煙でいぶされて保存食をつくることができました。

囲炉裏ではおもちを焼いたり久慈川や水路でつかまえた魚を焼いたりしていたよ(S13生 石神)



ランプの明るさ

幕末から明治にかけて西洋から入ってきた石油ランプは、人々にとって衝撃的なものでした。それまで使われてきた灯籠や燭台よりもはるかに明るい光に人々はおどろき、急速に普及していきました。



ランプは黒くすすけてしまうからいつも夕方になると「ホウロウみがけ!」って言われてよくみがいたよ(S13生 石神)

エネルギー源の変化と私達のくらし

昭和前半の道具と現在の道具でエネルギー源は何が違うのでしょうか。

昭和前半は「マキ」や「木炭」を使っています。木は私達の生活に欠かせないものでした。燃やせるものがないと凍えてしまいます。そこで人々は植林をして里山をつくり、共同で管理して、枝はマキに利用したり、落ち葉は畑の肥料や苗床にするなど、自然を利用しながら生活をしていました。

一方で、現在は火事になる可能性が低く煙もでない「電気」を用いた道具が主流になっています。そのため、マキを利用する必要がなくなり、地域にあった里山は管理されず徐々に姿を消していつているのです。



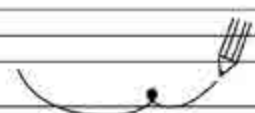
【展示物一覧】

臼、杵、羽釜、囲炉裏、火消壺、灰かき、鉄瓶、石油ランプ、火熨斗、炭火アイロン、電気アイロン、糸車、綿繰り機、車長持、足踏み式ミシン、水がめ、炭俵、ベンケイ、火鉢、置きコタツ、行火、メンコ、ペーゴマ、お手玉、罎

展示期間中にアンケート調査をしました!

みんなでつくる展示 皆さん、展示されている道具を使ったことがありますか?そしてそれはいつ頃使いましたか?

NO	出身	年齢	道具	いつ使用していましたか?	思い出
1	若手県	84	足踏み式ミシン	昭和30年代~令和4年	古着をこわして子どもの服を作った。
2	水戸市	54	足踏み式ミシン、黒電話	小学生	ミシンで家庭科の宿題をやった思い出。1家に一台の電話。友人から電話がかかってくる取次をしていた思い出があります。
3	勝田市	48	足踏み式ミシン、黒電話	小学生	踏み方を間違えると大変で苦労した記憶です。小学校で使いました。
4	ひたちなか市	41	黒電話	小学校低学年くらいまで?	ダイヤルを回すのに時間がかかる。間違えると大変なのでいつも緊張しながら電話をかけていた記憶があります。
5	勝田市	44	黒電話	中学生のころまで	友達の家で電話して長電話をするときくるくるのコードを指にまいて話していました。
6	横浜市	47	黒電話	小学校3年生位まで	電話のかけ方を言った時のことを覚えています。
7	水戸市	38	黒電話	10歳くらいまで	電話帳を見ながら遠くに住む祖父母にかけて学校のことを話したりダイヤルを回していたずらして怒られたりしました。
8	東海村	47	黒電話	20歳頃まで	妹が黒電話を使っているのが恥ずかしいと言っていた。
9	常陸太田市	69	黒電話(2015年くらいまで母屋で) 行火(1970年頃まで)土間(1990年頃まで)		高校受験は雨漏りのする釜屋根の下で将来の夢(?)を持ちながらなんとなく勉強した。
10	水戸市	44	黒電話(小学校低学年頃?)、足踏み式ミシン(小学校の家庭科の授業)		小学校の家庭科室には電動と足踏み式ミシンがあり、電動ミシンの方が使いやすいので喜んでいた。
11	東海村	40	黒電話、足踏み式ミシン	高校生の頃(黒電話)	うちはしばらく黒電話を使っていて、ポケベルの時も黒電話で困った記憶があります。プッシュ回線に早くしてもらいたかったです。
12	東海村	61	黒電話、足踏み式ミシン	昭和45年頃	懐かしいものは保存してほしいです。どれも家族のことが思い出されます。
13	那珂市	30	黒電話、鉄鉢、火鉢	小学校	黒電話の使い方を当時知っていたのは俺だけかも。
14	日立市	46	黒電話、足踏み式ミシン、土間、あやとり、お手玉	黒電話(20代まで)	家はすま風で寒く土間は食品を保管したり遊び道具は全て手作りでした。
15	宮城県	78	黒電話、足踏み式ミシン、長持、炭火アイロン、火のし、こたつ、火鉢、圍炉裏、白差、水がめ、手桶	10歳くらいまで	水がめに水を蓄えるのは子どもの仕事でした。手桶で運びました。また掃除も。
16	ひたちなか市	71	電気アイロン、置炬輪、ちゃぶ台、黒電話、足踏み式ミシン、草笥、火鉢、炭盆	昭和30年代~(ちゃぶ台は現在も使用)	ミシンはズボンのすそ直し等で使った。(ボビンは子どもの遊び道具だった)
17	ひたちなか市	63	火鉢、ひのし	昭和30年頃	火鉢はお餅式や割り合いなどで人が集まった時皆が火鉢の周りにあつまって暖をとっていた。ひのしは木綿の服を洗ったときに使っていたのをみた。
18	常陸太田市	47	ミシン、おひつ、炭、糸車、うす	昭和39年	ここに来たらなつかしくてほっとします。あの頃は水道も無く井戸でした。
19	群馬県利根郡	71	臼(昭和30~40)、ランプ(昭和30)、ミシン(昭和30~40)、電話(昭和40~)		
20	水戸市	9	臼と杵	6歳~今	毎年餅つきでつかっています。
21	ひたちなか市	9	臼と杵	お正月	おモチをつくとき。
22	東海村	12	臼と杵	保育園	餅つきに使った記憶があります。
23	東海村(須和間)	11	臼と杵	正月の前日(大晦日)	みんなでおもちをついた。
24	福岡	12	お手玉	3歳~	楽しかった。
25	茨城	11	お手玉	4年生	楽しかった。
26	ひたちなか市	9	お手玉	小学校1年生	まずはひとつで練習してとても大変だったけど楽しかった。
27	東海村	11	お手玉	小学校1年生、5年生	全然できなくて。友達ができていくやしくてがんばってできるようになりました。
28	東海村	7	お手玉	幼稚園	楽しかった。
29	東海村	11	お手玉	4年生	難しかったけど楽しかったので良かった。
30	東海村	12	お手玉	小学4年生	祖母が持っていたので練習しました。
31	ひたちなか市	8	お手玉	小学校一年生	友達はできていたけど私は何回やってもできなかった。
32	ひたちなか市	14	お手玉	小学生	最初はなかなかできなかったけど練習している中でできるようになったのしかった。
33	郷沼	4	お手玉、コマ		おばあちゃんの家でよく遊んでいました。お手玉が破れて中からお豆がでてびっくりしました。
34	東海村	15	お手玉、扇、コマ	小学生の頃	とても楽しかった。タイムスリップした気持ちになった。
35	水戸市	15	お手玉、扇、コマ	幼稚園、小学校のイベント	昔の人がやっていた遊びをやっている経験になった。
36	筑西市	70	お手玉、パー勢	昭和30年代	姉妹で遊んだ。
37	東海村	8	けんだま	今日	お父さんは難しい技に挑戦。
38	東海村	9	けんだま	今日	
39	東海村	9	こま	今日	
40	東海村	9	こまとけんだま		
41	いわき市	64	メンコ	小学校1年生くらい	いわきではメンコであそぶことをベッタとっていました。四角(長方形)でした。
42	日立市	51	めんこ	小学生	集会所でバアブチしたこと。
43	日立市	72	メンコ(パー)	昭和30年頃	広場に街灯がとるまで夢中になってやった。
44	東海村	9	メンコ、お手玉	7~8歳くらい	メンコはすごく楽しかった。お手玉はたのしかった。
45	東海村	10	メンコ、お手玉、臼、杵	小学校、幼稚園	楽しかった。メンコは少し難しかった。
46	東海村	7	メンコ、お手玉	4歳くらい	おばあちゃんと遊んだ。
47	日立市	43	メンコ83才くらい~小学校低学年)、黒電話(なくなるまでずっと)		好きな絵柄のを大切にしていました。ひまなときに覚えた番号をまわして遊んでいました。



アンケート結果から

調査結果を見ると、現在でもつかわれているのは「臼と杵」のようでイベントで使用したことがある方が多いようです。またメンコやお手玉などは現在「昔遊び」として学校などで行われていることが分かります。

30代から上の年代は黒電話、40代から上の年代は足踏み式ミシンを使っていたことがあるようです。そして60代から上の世代は、火鉢や行火、火熨斗や囲炉裏を使ったことがあるようです。囲炉裏などが日常で使われるのはおおよそ昭和30年代頃までである様子が見えてきます。

昭和30年から大型電気を迎え日本経済は急速に発展していきました。三種の神器と呼ばれる白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫が登場し、生活様式を大きく変えることとなりました。また、従来の家よりも「明るい」ということで人々はこぞって文化住宅を建てるようになりました。文化住宅は藁ぶきや茅ぶき屋根ではなく瓦屋根の家で、洋風の外観であるが、室内は和風であったり、和風な外観であるが、洋風な応接室があるなど、和洋折衷の様式を持っていました。

昭和の前半と後半では、生活様式が大きく異なってくるのが、今回のアンケート調査からもわかっています。

そして、平成生まれの世代には、昭和の暮らしは「昔の体験」として、イベントなどで特別な体験として経験するようです。

冬
12月~2月

December-February
MARUHAKU JOURNAL

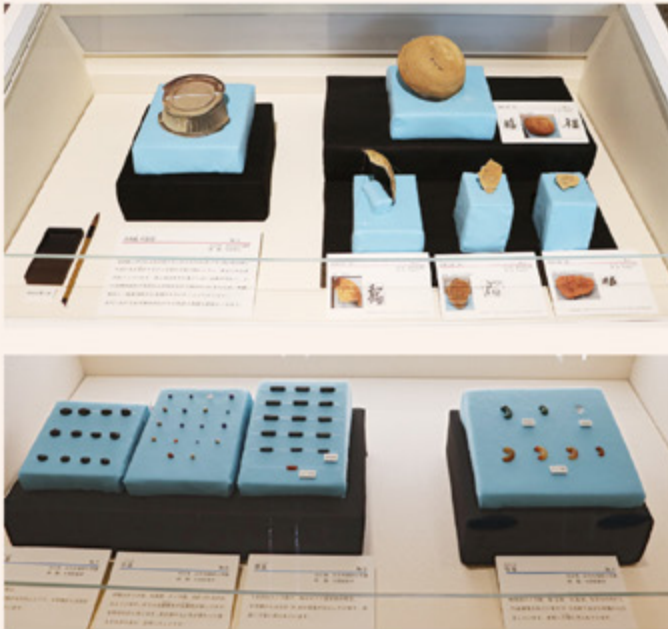
まる博マルシエ

遺跡

皆様の足元には数多くの遺跡が眠っていることを知っていますか。

現在東海村では、178か所の遺跡を確認しています。遺跡の中を開発する際には発掘調査が行われます。本年度の発掘調査では、多くの埴輪はじわが発見され、まさに埴輪年となりました。

そこで、今回の展示では令和3年6月に石神外宿地区で発見され、大きな話題となった埴輪の一部を先行して公開しました。また、その他に古墳の副葬品である玉類、集落跡から発見された墨書土器ぼくしょどきと硯すずりも展示しました。



【展示物一覧】

人物埴輪(男子)、人物埴輪(女子)、家形埴輪

出土地：戸ノ内古墳 時期：6世紀半ば

勾玉、管玉、小玉、素玉

出土地：白方古墳群9号墳 時期：6世紀後半

墨書土器「福」、須恵器円面硯

出土地：荒谷台A遺跡、豊岡宮前遺跡 時期：平安時代

よみがえる石神の埴輪

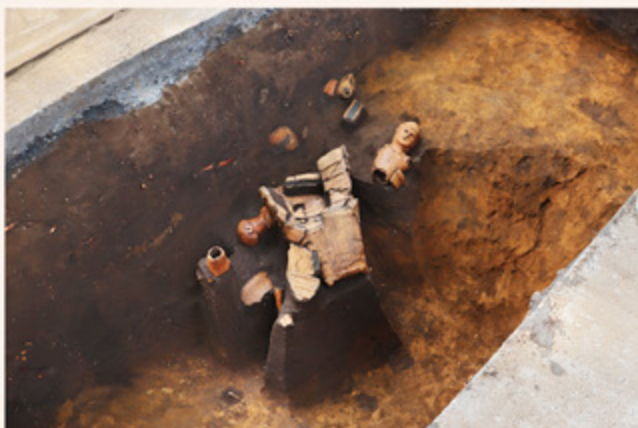
令和3年6月、石神小学校側にある願船寺進入路の入口において、戸ノ内古墳の調査が行われました。

遺跡は地中深くにあるため、道路のアスファルトを切断した後、重機で1mほど掘り下げ、丁寧に確認作業を進めたところ、古墳の周りに巡る溝(幅約4m・深さ約0.7m)を発見しました。

この溝からは円筒埴輪をはじめ、家形埴輪や人物埴輪などが出土しました。人物埴輪は、男子(ひざまづく人物など)と女子(巫女?)の埴輪が見つかっています。

今回の調査は、東海村の古墳時代を考える上で重要な成果になると考えられます。その詳細は埴輪の復元作業などの整理を経て、一冊の報告書にまとめられます。

戸ノ内古墳は本来の形や大きさが不明で、まだ謎に包まれた古墳といえますが、今後、その全容解明に向けて調査研究を進めていく予定です。





冬
12月~2月

December-February
MARUHAKU JOURNAL

とうかいまるごと
博物館

古墳巡り



【日 時】 令和4年1月15日(土)

【場 所】 中道前古墳群

【講 師】 中泉 雄太 当館学芸員

【参加者数】 13名

石神地区の古墳群を巡り、その立地について考えました。



教えてシェリー！ サケってどんな魚？

Q: 久慈川に来るサケについて教えて！

A: 秋になると、東北日本の河川にはサケが遡上してきます。日本の河川に遡上するのは一般にシロサケと呼ばれるサケです。遡上するサケは60%以上が3歳魚、20~30%が4歳魚、残りの10~20%が1歳魚や5歳魚、6歳魚であることが分かっています。遡上したサケたちはカップルを作り、川底に産卵します。産卵が終わると、サケたちは長くて1週間ほどで力尽きます。力尽きたサケたちは、鳥に食べられたり自然に分解されたりして土にかえります。こうしてサケたちの命は巡っていくのです。

私がサケについて詳しく説明するよ！

シェリー

文芸館の自然の字芸家。生き物が大好き！



Q: どうして秋鮭は美味しいの？

A: サケの旬は秋。秋鮭は脂がのっていて美味しいです。でも、なぜ春でも夏でも冬でもなく、秋が旬なのでしょう？理由は2つあります。

まず、人間にとって都合がいいということが挙げられます。秋になるとサケたちは一斉に大海原から日本沿岸に集まり、川を遡上します。漁師たちにとってはこれが漁をするのに好都合で、たくさん捕まえてたくさん売ることができます。

次に、このころのサケの体の変化が挙げられます。たくさん餌を食べて栄養をたくさん蓄えたサケたち。繁殖期になると産卵に集中するため、胃や腸などの消化管がなくなっておなかにたくさんの卵を抱えます。さらにオスは、戦いに備えて脂肪の鎧で身を守ります。これが人間からすると①はらわたがなくて捌きやすい、②身と卵両方を食べられる、③脂がのっている、という「おいしいところだけ」集めた状態なのです。

こういうわけで、サケの旬は秋なのです。今日の晩御飯に秋鮭はいかがですか？

Q: サケのオスとメスの見分け方を教えて！

A: サケといえば、曲がった鼻先に盛り上がった背中……って、思っていますか？実はそれ、繁殖期のオスの特徴なんです。

サケのオスは繁殖期になると鼻先が曲がり、牙が大きく鋭くなり、背中が脂肪で盛り上がります。鼻先と牙はオス同士の争いの時により攻撃しやすくするために、背中が攻撃されやすい場所を守るために変化します。また、婚姻色と言って、「僕は繁殖ができる魅力的なオスだよ」とメスにアピールするための赤い模様が出てきます。このほかにも、オスの特徴として脂びれが大きいことや尾びれの切れ込みが深いことが挙げられます。

サケのメスは繁殖期になっても鼻先はあまり曲がらず、背中も盛り上がりません。婚姻色は帯状の黒い模様で、オスのような赤い婚姻色はオスほどははっきりと出てきません。脂びれも小さく、尾びれの切れ込みは浅いです。

ところが、時々オスのサケなのに黒い帯状の模様を持つものがあります。これは弱いオスの特徴で、強いオスに負けてメスとカップルになれなかったオスにこのような模様が現れます。これはなぜかという、弱いオスは何かして子孫を残すために、産卵しているカップルの間に割り込むことがあるためです。割り込むときにメスと同じ模様をしているとカップルのオスに怪しまれないのでこういう生態ができたと考えられています。いわば、サケの「女装」ですね。

オス



弱いオス



メス



どんぐりの見分け方

意外と見分けが
難しいどんぐり、
違いは何か？



名前	色	形	つや	その他の特徴
マテバシイ	 オレンジ色～ 赤茶色	三角形	マットな つや	ぼうしがついてい た白いところは へこんでいるの で、横からみると 白いところは見え ない!
スダジイ	 こげ茶色～ 黒	三角形。 実は少し 角ばっている	マットな つや	横から見ると白 い部分がしっかり 出張っている! 食べるとおいしい といううわさも …。
シラカシ	 ベージュに 近い茶色。 色が上下に 分かれる	丸っこい だえん形	マットな つや	おへそ(ぼうしが ついていた白い 部分とは反対側) はしっかりでべ そ。味はしぶくて おいしくない。
アカガシ	 赤茶色。 色が上下で 分かれる。	丸っこい だえん形	つやつや	おへそ(ぼうしが ついていた白い 部分とは反対側) はしっかりでべ そ。味はしぶくて おいしくない。
コナラ	 赤茶色	細長い だえん形	つやつや	日本でどんぐりとい えばこれ! 交流館にも生え ているよ!
クヌギ	 こげ茶色～ 赤茶色	まるい	つやつや	ぼうしはくるんと したとげとげがい っぱいでまるで顔 みたい!

めざせ、どんぐりはかせ!

博物館長と歩く植物観察会

身近な植物図鑑を作ろう

まる博研究員 山本美恵子

鶴るみ子

歴史と未来の交流館博物館長

安嶋 隆

1 はじめに

博物館長と歩く植物観察会は「交流館周辺を歩いて植物を観察することで、身近な自然環境に親しみ郷土理解を深める」ことを目標に、毎月第一土曜日の午前9時30分から11時に実施しました。まる博研究員の山本さん、鶴さんと安嶋がスタッフとして、毎回15名ほどの村内外の参加者の皆さんと身近な自然を観察しました。

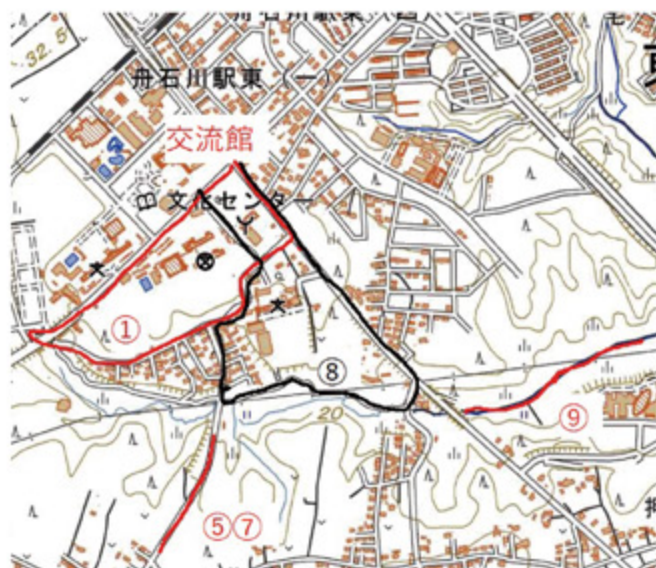
2 各観察会の日時、観察内容、観察場所

- ① 8月11日(水) 道ばたの夏の植物(村松、交流館周辺の道ばた)
- ② 8月25日(水) 雑木林内の夏の植物(村松、交流館付近の雑木林) 中止
- ③ 9月18日(土) 道ばたの秋の植物(村松、交流館周辺の道ばた) 中止
- ④ 10月2日(土) 林内のシダ植物(石神内宿、石神城址公園)
- ⑤ 11月6日(土) 紅葉する樹木(須和間、雑木林)
- ⑥ 12月4日(土) スギ・ヒノキ植林内の植物(舟石川、林の階層構造)
- ⑦ 1月8日(土) 落葉樹の冬芽(須和間、雑木林)
- ⑧ 2月5日(土) 冬越しする植物(村松、交流館周辺のあぜ道)
- ⑨ 3月5日(土) 休耕田の変化(村松、絆北側緑地)

3 観察会で心がけたこと

第1は「植物に親しむ」ことです。
 気になった植物や疑問に思ったことを聞いたり、お互いに教えあったり、あるいは雑談をしながら植物に親しみましょう。そして全員が参加者の1人であることを意識しましょう。
 第2には「五感」を使うことです。

- ・目で見て、葉の形態や花の構造を観察してみる。
 - ・噛んでみて、果実の味や茎の苦みを感じる。
 - ・手の感触で葉や茎のざらつきや毛の生え方を感じる。
 - ・嗅いでみて、花や葉の臭いの違いを感じる。
 - ・時には耳を澄まして、草や木のそよ音を注意してみる。
- 第3には植物を知ることが歴史、民俗などを学ぶことに



電子地形図25000(国土地理院)を加工して作成

通じています。

植物名の由来や花のつくりを知ると先人たちの生活や人となら植物のかわりが思い浮かびます。先人は食用、薬草、生活用具など、植物を日常生活の中でごく普通に利用していました。野外での観察から先人の生活の知恵を学んでみましょう。

① 道ばたの夏の植物 村松、交流館周辺の道ばた

8月11日(水)

観察ポイント

「道ばた」には多くの雑草が生育しています。雑草と呼ばれる名は「役に立たない、迷惑である」という理由で人間が勝手に付けた名称です。

雑草の正式な名前や外来植物、樹木にも目を向けてみましょう。



不著名な名前の代表:ハキダメギク(左) とヘクソカズラ(右)

観察した植物

アオツツラフジ、アカメガシワ、アカカラマツ、アメリカスズメノヒエ、イヌツグ、イヌワラビ、ウグイスカグラ、エノキ、エノコログサ、エヒツル、オオニシキソウ、オウタチカタバネ、オヒシバ、カシイチゴ、ガズミ、キブシ、クヌギ、クマヤナギ、クリ、クロマツ、クワ、コメダヤツリ、コスズメガヤ、コナラ、コメダヤツリ、コマツヨイグサ、サルトリイバラ、サンショウ、シナダレスズメガヤ、シラカンシロツメクサ、スイカズラ、スギナ、スズキ、スズメノヒエ、スベリヒユ、セイタカアワダチソウ、センニンソウ、ゼンマイ、タラシ、チガヤ、ナツツタ、ナツツバキ、ナツノタムラソウ、ナンテン、ナルデ、ネコハギ、ネジキ、ノアザミ、ノゲシ、ノブドウ、ノミノツツリ、ハリエンジュ、ヒノキ、ヒメジョオン、ヒメムカシモギ、ヒヨドリバナ、フジ、フタクサ、フタバ、ヘクソカズラ、ベニシダ、ヘラオオバコ、マダケ、マユミ、ミツバアケビ、ミドリヒメワラビ、ムラサキシズメ、メヒシバ、ヤブデ、ヤブカラシ、ヤブウルシ、ヤマノイモ、ヤマモモ、ヤマユリ、ヨウシュヤマコボウ、ヨモギ、ワラビ。

参考図書

街でよく見かける雑草や野草がよくわかる本、岩槻秀明、秀和システム
 野草の名前(春・夏・秋・冬)、高橋勝雄、山と溪谷社
 色で見分け五感で楽しむ野草図鑑、高橋修、ナツメ社
 植物の観察と標本の作り方、本田正次・矢野佐、ニューサイエンス社

④ 林内のシダ植物(石神内宿、石神城址公園)
10月2日(土)

観察ポイント

石神城址公園内ではスギ林、アカガシ、シラカシなどを含む常緑樹林、ソメイヨシノやコナラなどの落葉樹林、ウバユリやコバギボウシなどが群生する斜面の湿地などが見られます。

今回はスギ林に見られるシダ植物に注目してみました。

花が咲かないシダ植物は庭先、道沿い、林の周辺や林内、草原などあらゆる場所に生育しています。花が好きな人でも「シダはちよっと」。種類の区別が難しいので、「と敬遠することが多いようです。

しかし、次のようなシダ植物特有の見分け方を覚えるだけで「シダって楽しい」と植物観察に変化ができるかもしれません。

- 1 全体の形：葉の切れ込み方(羽片)や色合い。
- 2 胞子のう：葉の裏にあり、中に胞子が入っている。虫がついてると間違えられる。
- 3 リン片：葉柄や中軸にあるうろこ状のもの。



スギ林内のイワガネソウの群落



観察した植物

スギナ、イヌスギナ、ゼンマイ、イワヒメワラビ、ワラビ、イワガネソウ、トラノオシダ、ホシダ、ナゲシダ、ヒメシダ、ミソシダ、ミドリヒメワラビ、クサソテツ、コウヤワラビ、イヌガンソク、イヌワラビ、サトメシダ、ヤマイヌワラビ、ヘビノネゴザ、ホンバシケシダ、シケシダ、キヨタキシダ、ナガバヤブソテツ、ヤマヤブソテツ、テリハヤブソテツ、ヤマイタチシダ、ベニシダ、トウゴクシダ、オクマワラビ、アイアスカイノデ、ノキシノブ、フモトシダ。

参考図書

葉によるシダの検索図鑑、阿部正敏、誠文堂新光社
写真でわかるシダ図鑑、池畑伸、トンボ出版
シダハンドブック、北川淑子、文一総合出版
野外観察ハンドブックシダ植物、村田威夫、全国農村教育協会

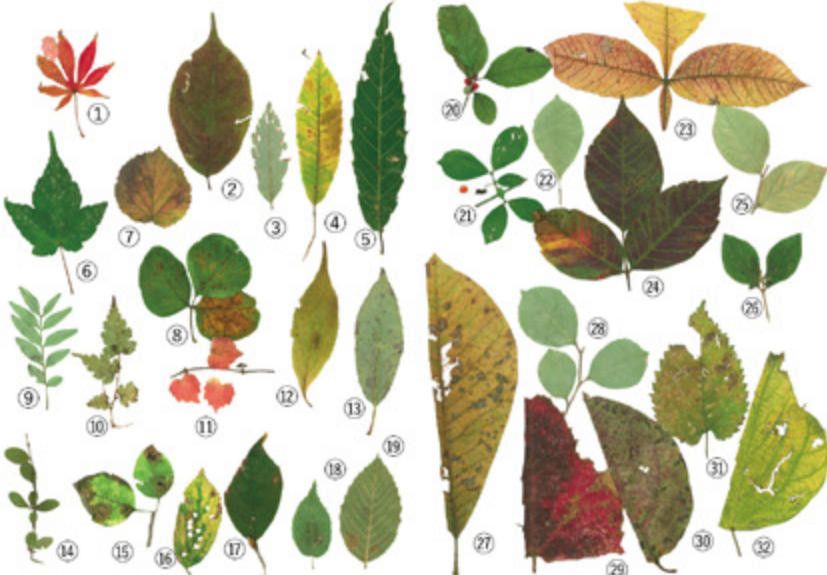
⑤ 紅葉する樹木(須和間、雑木林) 11月6日(土)

観察ポイント

雑木林は春の新緑、夏のひんやりとした林内、秋の紅葉、冬の冬芽など、四季の変化を身近に感じることができるところです。

落葉樹の葉の色は春から秋までのクロロフィルの緑色からアントシアンの赤やカロチノイドの黄色に変化します。特に雑木林では多くの樹木の紅葉が観察できます。

観察した樹木



- 1 イロハモミジ
- 2 ウワミズザクラ
- 3 コナラ
- 4 クリ
- 5 クスギ
- 6 ウリカエデ
- 7 ガマズミ
- 8 ツタウルシ
- 9 サンショウ
- 10 コゴメウツギ
- 11 ナツツタ
- 12 ムラサキシキブ
- 13 パンコヤナギ
- 14 メギ
- 15 アオハダ
- 16 エノキ
- 17 ヤマコウバシ
- 18 アカシデ
- 19 イヌシデ
- 20 ウメモドキ
- 21 コマユミ
- 22 エゴノキ
- 23 スルデ
- 24 ヤマウルシ
- 25 カマツカ
- 26 ヤマツツジ
- 27 ホオノキ
- 28 ヤマウグイスカグラ
- 29 エビヅル
- 30 カキノキ
- 31 ヤマゲワ
- 32 アカメガシワ

参考図書

秋の樹木図鑑(紅葉・実・どんぐりで見分ける400種)、林得之、廣済堂出版
樹木見分けのポイント図鑑、村上能力他、講談社
樹木の葉 実物スキャンで見分ける1100種類、林得之、山と溪谷社
葉っぱで見分け五感で楽しむ樹木図鑑、林得之、ナツメ社

階層構造のイメージ



- 高木層8m以上
- 亜高木層3~8m
- 低木層2~3m
- 草本層1m以下

⑥ スギ・ヒノキ植林内の植物
(舟石川、林の階層構造) 12月4日(土)

観察ポイント

スギ林は、高木層、亜高木層、低木層、草本層という4階建ての建物に例えられる階層構造をしています。各層にはそれぞれ特徴的な種類が生育しています。数カ所のスギ林を調べて、各層ごとに出現した植物を比較してみました。

スギ林内で増えている種類



ムサシアブミ



センリョウ

各層の構成種類

高木層：スギ、コナラ
 亜高木層：シラカシ、スギ
 低木層：アオキ、アズマネザサ、イヌツゲ、ウワミズザクラ、サンショウ、シユロ、シラカシ、スギ、スダジイ、マユミ、ムラサキシキブ、ユズリハ
 草本層：アイアスカイノデ、アオキ、アズマネザサ、イヌツゲ、イヌワラビ、イノデ、オオイトチシダ、オオバノイノモトソウ、オオベニシダ、オクマワラビ、オシダ、キツタゲシダ、マワラビ、オシダ、キツタゲシダ、シダ、ジャノヒゲ、シユロ、シラカシ、シロダモ、センマイ、センリョウ、タフノキ、チヂミザサ、ツタ、ツルマサキ、テイカカズラ、テリハヤブソテツ、トラノオシダ、ナガバヤブソテツ、ナンテン、ネズミモチ、ハエドクソウ、ハリガネワラビ、ヒサカキ、ヒナンカズラ、ベニシダ、マンリョウ、ミスヒキ、ミソシダ、ミツバアケビ、ミドリヒメワラビ、ムサシアブミ、ヤダク、ヤツデ、ヤブミョウガ、ヤブラン、ユズリハ、リョウメンシダ。

参考図書

日本の植生図鑑・森林編、中西哲他、保育社
 自然観察ハンドブック(フィールドガイドシリーズ)、日本自然保護協会(編集)、平凡社

観察した冬芽



⑦ 落葉樹の冬芽(須和間、雑木林) 1月8日(土)

観察ポイント

秋から初冬に葉を落とした落葉樹は、冬の間、冬芽の状態です。春を待っています。秋のうちに樹木に着けておいたラベルをたよりに樹木の種類を判定してみました。

観察した冬芽

アオハダ、イヌシデ、ウメモドキ、ウリカエデ、ウワミズザクラ、エノキ、カキノキ、ガマズミ、コナラ、コマユミ、ナツツバキ、ニフトコ、ムラサキシキブ

参考図書

冬芽ハンドブック、林得之、文一総合出版
 樹皮と冬芽、四季を通じて樹木を観察する、431種(ネイチャーウォッチングガイドブック)、鈴木庸夫他、誠文堂新光社

⑧冬越しする植物(村松、交流館周辺のあぜ道)
2月5日(土)

観察ポイント

植物は実(種)、地下茎、ロゼット葉、冬芽などさまざまな方法で冬を過ごしています。今回は地表付近に葉を広げてロゼット葉で冬越しする植物に注目してみました。
あぜ道、道路沿い、土手斜面など生育環境が異なると生育している種類も違ってきます。

主なロゼット葉



イモカタバミ



ウラジロチチコグサ



オオアレチノギク



オニタビラコ



オニノゲシ



ギンギン類



ナガミヒナゲシ



ニワゼキショウ



ヒメオドリコソウ



ブタナ



フランスギク



ヘラオオバコ



メマツヨイグサ



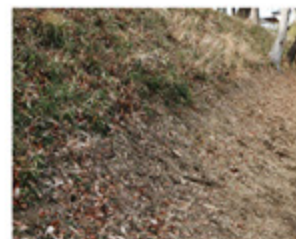
ヤブジラミ類



雑種タンポポ



あぜ道



土手斜面



道路沿い

観察した植物

アズマザサ、アズマネザサ、アメリカセンダングサ、アレチギンギク、イヌコリヤナギ、イモカタバミ、ウラジロチチコグサ、オオアレチノギク、オオニタビラコ、オニノゲシ、オランダミミナグサ、カタバミ、カナムグラ、ラスノエンドウ、ギンギン類、コセンダングサ、雑種タンポポ、シナダレスズメガヤ、スイバ、セイタカアワダチソウ、タコノアシ、タチイヌフグリ、タネツケバナ、チガヤ、ナガミヒナゲシ、ナキリスゲ、ニワゼキショウ、ノゲシ、ハコベ、ハナミズキ、ヒガンバナ、ヒメオドリコソウ、ヒメツルソバ、フタメ、フランスギク、ヘラオオバコ、ホウキギク、ホトケノザ、マツカサスキ、ムクゲアカバナ、メマツヨイグサ。

参考図書

身近な雑草の芽生えハンドブック、浅井元朗、文一総合出版
散歩の花図鑑507、岩槻秀明、新星出版社
野草のロゼットハンドブック、亀田龍吉、文一総合出版

⑨休耕田の変化(村松、絆北側緑地)
3月5日(土)

観察ポイント

谷津田は生物の宝庫と呼ばれ、多くの生物のすみかでした。さまざまな理由により、谷津田が休耕田(放棄水田)となっても、多くの生物がまだ生き残っています。
休耕田には優占する植物の違いによってカサスゲ群落、アズマネザサ群落、セイタカアワダチソウ群落、ヨシ群落、ヨシーガマ群落、ヤナギ群落、ハンノキ群落などが見られます。
あぜ道沿ではヤナギの茎についた虫こぶ、ハンノキの雄花と雌花、ガマの穂、最強のひつき虫・アレチヌスビトハギなどが目立ちました。

観察した植物

アイアスカイノデ、アスナロ、アズマネザサ、アレチヌスビトハギ、イヌコリヤナギ、エゾノギンギク、オクワラビ、カサスゲ、ガマ、キブシ、コナシ、スイバ、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ、ツルマメ、テリハヤブソテツ、ヌルデ、ハンノキ、ヒメガマ、ヤマザクラ、ヨシ。

参考図書

虫こぶハンドブック、薄葉重、文一総合出版
自然観察の方法、金井郁夫、講談社現代新書



ハンノキ林



ヨシーガマ群落



まる博 研究員 山本美恵子

令和3年8月からコロナのため2回中止になりましたが、計7回の「植物館長と歩く植物観察会」に参加しました。交流館付近の道ばたに生えている見慣れた植物の健気さ、すっかり葉を落とした冬の木々の冬芽の姿、休耕田が自然の姿に戻っていく過程、今では人が日常生活で利用しなくなった為、荒れてしまった雑木林の姿など興味と郷愁を感じさせる内容でした。

また、ところどころで聞く館長の植物トリビアに驚いたり、素人の素朴な質疑応答を入れながらの観察会は、初めて会う参加者同士でも話が弾みアツという間に時間が過ぎてしまうくらいでした。

道ばたの花一輪でも多様の変化があり、「そんなに覚えきれない」とげんなりしましたが、「そうか。人間だって目の色が違ったり色々だもんね」と考えるとストーンと納得できて面白いものです。今まで見ていたのに、観てこなかった植物という隣人を、これからも大切にしたいと思います。



まる博 研究員 鶴 るみ子

「植物の知識が増える事、間違いなしです。」という文句に惹かれて、「博物館長と歩く植物観察会」に関わらせて頂きました。野山を歩くフィールドワークには一度しか参加できませんでしたが、石神城跡の鬱蒼とした林の中に、多くの種類のシダが生育しているのを見ました。

シダの種類の多さ、見分け方の細かさに驚かされましたが、それらを瞬時にして見分けられる、安嶋館長は驚異的でした。

フィールドワークの後にはまとめ日が設けられますが、そちらでも和気藹々と植物の話の伺えましました。

植物の名前は現在使われていない言葉で出来ているものも多く、昔の生活を伺い知る事ができる話など、興味深かったです。

今後は、フィールドワークにも参加しつつ、色々な植物との出会いを期待しています。仕事にも関係することなので楽しく学ばせて頂きたいと思えます。自然を知ることが出来れば、何気ない日常も彩られるはずです。

道端にある小さな草であっても名前があり特徴がそれぞれですから、それらが見分けられれば、ただ歩くだけでもぎゅっと楽しくなると思うのです。



歴史と未来の交流館博物館長 安嶋 隆

動植物名を図鑑などでカタカナ表記するようになってから50年以上経過しているそうです。確かに古本屋で購入した植物図鑑では漢字やひらがなで記述してありました。

漢字表記では名前の由来などが直感的に理解できたものがカタカナでは味気ないと思うことが度々あります。特に観察会などではメモ用紙にサッと漢字で書いて解説できたら喜ばれると思うことが度々あります。しかし、植物名の漢字表記はレベルが高く反省の日々が続いています。

身近な植物を漢字で表記するとヘクソカズラは屁囊葛、ヌスビトハギは盗人萩、ホウチャクソウは宝籬草、テイカカズラは定家葛(藤原定家のこと)、ウラシマソウは浦島草(浦島太郎のこと)、ゲジゲジシタは蜘蛛羊歯、マムシグサは蝮草、アブノメは蛇目、カヤツリグサは蚊帳吊草、クサギは奥木となります。

植物名は植物の形態はもちろんですが、生活用具、歴史、民俗、文学など様々な分野からのイメージが由来となっています。

このように植物名に親しむことは自然、歴史、民俗を学ぶことに通じています。

植物観察会が何気なく咲いている草木たちに語りかけるきっかけになったとすれば、参加された方々の熱意のおかげと担当者一同、感謝しております。



古墳時代の石材調査

—小さな石の故郷を求めて—

東海村の遺跡調査団

専門講座がはじまる

東海村には、約1年の「歴史と未来の交流館研究員養成講座」を経て、交流館を拠点に東海村の歴史や自然に関心を持ち、調査や研究など様々に活躍している方々がいます。

その名も通称「まる博研究員」。

そして本年度から、より専門的な調査研究に挑戦する専門講座がスタート。その一つが今回紹介する「古墳時代の石材調査」です。今回の講座では「東海村の遺跡調査団」というチームを結成し、交流館学芸員2名と共に、まる博研究員の和泉ひとみさん、上野千枝子さん、谷口東子さんが調査を担当しました。また石材の調査分析では、地質学が専門である千葉科学大学の菊池芳文先生にご協力いただきました。

これは、東海村に眠る古代の謎を

探るため、遺跡出土品の分析や現地調査に挑んだ東海村の遺跡調査団の記録です。

石製模造品の謎に迫る

東海村の遺跡からは、色々な種類の石質製品いしせいせいひんが発見されていますが、今回は一種類の出土品に限定して調査を進めました。その出土品は、主に古墳時代こふんじだい（約1600年前）の集落跡から出土した「石製模造品いしせいもぞうひん」です。

この石製模造品は、やわらかい岩石を素材として、金属製の道具を真似て作られた石の道具です。鉄製の農具や工具、剣や鏡など様々な真似ています。その使い方は、土器どくわなどの実用品とは異なり、古墳の副葬品ふくさうひんやムラでのマツリで使われた祭祀具さいしぐと考えられています。私たちは、この

石製模造品の石材に使われた岩石に注目し、その種類や産地（入手できる場所）を調べました。

そこで最初に行ったのが、石製模造品を顕微鏡けんびきょうで観察して岩石の種類を特定することです。今回観察した石製模造品の数は400点以上ありましたが、一つ一つ地道に観察しました。気の遠くなるような作業でしたが、その結果、石製模造品の石材には「蛇紋岩じょうもんがん（滑石）」と「粘板岩ねんばんがん」の二種類の岩石が使われたことが分かりました。特に、蛇紋岩（滑石）製の石製模造品が圧倒的に多いことから、特定の種類の岩石を選んで石材に利用したことが分かります。



東海村出土の石製模造品

左から刺、鏡、勾玉の模造品で、手の平に乗るほどの小さな遺物です。

ロマンと情熱を胸に、古代探訪の旅へ



蛇紋岩(滑石)の
原石

常陸太田市長谷の山地部

常陸太田市中心部から東へ車で20分ほど走り、同市田渡町たわたりちょうのグランドスラムカントリークラブを通過しながら、山の方へ進むと茂宮川もみやがわに架かる小さな橋が見えてきます。この橋を渡った先が蛇紋岩(滑石)を採集した調査地への入り口です。

実際に現地を訪れると、目の前には大自然に囲まれた美しい景観が広がり、そこに心地よく響く川の音色が相まって、まるで別世界に迷い込んだような気分になりました。

さて、現地調査では、石製模造品の石材と類似した岩石をハンマーで砕いて採集し、それらを石製模造品と比較するためのサンプルとして持ち

ました。

今回、産地調査を行った場所は、蛇紋岩(滑石)の産地で知られる常陸太田市長谷ひたちの山地部、粘板岩を採集できる日立市の鮎川河口などです。特に、常陸太田市長谷の山地部(写真参照)は、重要な成果を得た調査地となりました。この地域は、地理的に阿武隈山地(高地)の南西部にあたり、古生代以降に形成された様々な岩石が見られます。その一つに主要石材の蛇紋岩(滑石)があり、ここが石の故郷ではないかと期待しました。

いざ現地調査へ出発

次に私たちは、使用石材の蛇紋岩(滑石)と粘板岩の産地を解明するため、地質図等の情報を頼りに現地調査に出かけました。果たして、小さな石(石製模造品)の故郷は、どこなのでしょう。



現地調査の様子 (日立市鮎川河口)

吹き荒れる雨風の中、一心不乱に石材を探す調査団。

帰りました。詳しい観察や比較は、顕微鏡で行いましたが、現地で長谷の蛇紋岩(滑石)を手にした際、「この石は、石製模造品の石材にとでも似ている」と感じました。

石材の分析に挑戦

そして私たちは、現地調査で採集した岩石と、石製模造品の石材に使われた岩石が同じ岩石なのかどうか、いくつかの分析を行って確かめました。

分析の方法は、顕微鏡観察による比較をはじめ、蛇紋岩に含まれる磁鉄鉱(鉱物)の特徴を利用したネオジム磁石による吸着実験、比重の測定など多岐に及びました。特に、蛇紋岩(滑石)製の石製模造品には、短時間で簡単にできる磁石を使った分析が有効でした。この手法は、縄文時代

などの石器石材の分析にも活用されています。

こうした分析の末、今回採集した蛇紋岩(滑石)や粘板岩は、石製模造品の石材に使われた岩石の可能性が高いことが分かりました。つまり、この結果は、使用石材が東海村の北部近傍に位置する阿武隈山地(高地)で入手できたことを物語っています。しかし、ここが調査のゴールではありません。今後も様々な角度からの調査を続けて、分析の質を高めたい予定です。

今回の調査によって、小さな石の



調査地位置図 地理院地図(電子国土Web)より作成。



石材分析の様子 採集した岩石を観察する調査団。

故郷が見えてきましたが、新たに多くの疑問も生まれました。例えば、古墳の石室に使われた岩石など、石製模造品以外の石材利用はどのようなのでしょうか。まだまだ課題は山積みですが、私たちの手によって、未知なる歴史の解明に近づけると、ロマンを感じずにはいられません。

東海村の遺跡調査団は、これからも東海村に眠る古代の謎を探求し続けたいと思います(中泉)。

まる博研究員より

石の調査、どうやるんでしょうと参加しました。
楽しいハイキングとはちょっと違いました。

道々、これは○石、ここは○地層とか普段見慣れた山道が教科書に見えたりしました。海で石を探しているときだったか、砂になったら海底に沈み込みマグマになり火山になったり岩になったりを繰り返すと聞いた時にはすごく壮大な話で思わず「へえー！」

拾ってきた石を顕微鏡で観察、古代の石と見比べました。本当に地道な調査ですがまだ一つの石についてだけです。これを繰り返すのかと思うとワクワクします。簡単に調査といっても改めて大変さと好奇心で次回が楽しみです(和泉ひとみ)。

石製模造品は「模造品」といっても遺跡から出土したもので、後世の人が形などを真似て作ったものは違う様だということが理解できました。

古墳時代の副葬品の石材には、ヒスイやメノウが使われているのを知っていました。しかし当時の一般な

人々がこのような貴重な石材を手に入れられず、身近にある石材を使って似たものを作ったようだと思うと、これらの副葬品が身近に感じられるようになりました。

今回の調査は、私が古墳時代の人になって祭事などに使えそうな石材を探し、選ぶことを頭に描きながら参加してみました。

今回は遺跡から出土した石材の特徴から調査地点を決めていただけましたが1600年ほども前の当時の人々が、先人からの言い伝えで石の産出場所を知り、東海村から現地まで足を運び真剣に石を選び、相当な手間を費やして作ったものだと想像すると、この「模造品」が高貴な石で作られたものと何ら遜色ない東海村の宝物のように思えてきました。

石材の調査は、手順として科学的な分析などが行われますが、私としては遺跡出土品から当時の東海村を思い描くことを中心にして、今後の活動に取り組んでいきたいと思っています。次の機会を楽しみにしています(上野千枝子)。



現地調査の様子(常陸太田市里川河原)



現地調査の様子(ひたちなか市磯崎海岸)

地道な作業であった。指定された色や形状が似通った石を河原や森から採集してくる。交流館に持ち帰りハンマーで叩き破片にする。顕微鏡で観察し、磁石につけ磁性の有無を確かめ、比重を測る。派手なことは何一つない。同様な調査を数百点の石製模造品にも行う。むろん、村指定の文化財である石製模造品をハンマーで叩く愚かなことはしない。ハンマーで叩く以外同じ調査をして、石の特徴の類似性を探るのだ。とにかく地道な作業である。石の採集時は横殴りの雨が降っていた。風も強く傘など論外であった。

しかし、胸躍りかつ優雅な時間であった。スマホを使って指先一つで多くの知識が得られ、多くのことができるこの時代に、実にアナログ的な調査なのだ。足を使い時間をかけゆっくりと、しかし着実に進む。速さと成果を求められるこの時代の流れに逆行するかのような、そんな優雅な時間を過ごせた。楽しかった。ただ、はじめの一步を踏み出しただけで、課題は多い。調べるほどに疑問が増えてくる予感がする。

学芸員のお二人には感謝したい。企画に参加する機会を与えてくだ



石材分析の様子

岩石の比重を測定する調査団。

さった。特に、自分が気に入ったというだけで色や形状が異なる石をこつそりと持ち帰りサンプルの中に忍ばせてしまったのを注意せずにそのまま見逃してくれた。遊び心を許してくれたのであろう。因みにその石は加工するには硬すぎるチャートと呼ばれる石であった。石製模造品の原料では最初からあり得ないものである(谷口東子)。

担当学芸員より

東海村の遺跡から出土するほとんどの石製模造品。

そのほとんどが報告書で「滑石」と記されるこの石は一体何の石で、古墳時代の人はどこからその石を採ってきたのでしょうか。今回、調査において、ほとんどが蛇紋岩であること、そして常陸太田市長谷産の蛇紋岩と似ていることが分かりました。人々が意図的に石材を選んでいることが分かります。冷たく無機質な遺物の向こう側に1600年前の人々の姿が見えるような気がしました。常陸太田市は現在も「石」で有名な場所です。墓石や庭石、様々な場面で私達は石を使っています。石と人と歴史は現在まで連綿と続いているのだと改めて実感しました。

今回は、古墳時代の石材調査として、まず石製模造品を調査しました。しかし、調査をすればするほど謎が深まってきました。まだまだ遺跡調査団の旅は続くようです。ロマン大爆発です(林恵子)。

東海村の学芸員となり、もうすぐ4年目を迎えます。私は元々、遺跡出土品の石材に興味があり、いつか東海村の資料を研究したいと思っていました。

調査研究の醍醐味は、自分の手で誰も知らない歴史を解明できることです。その原動力は「知りたい」という好奇心と、必ずその謎を解き明かすという情熱です。私は常にこの気持ち大切にしています。今後も東海村に眠る古代ミステリーに挑む私たちの活躍にご期待ください(中泉雄太)。



蛇紋岩(滑石)製の石製模造品



粘板岩製の石製模造品

発見!!

野生アズキ (ヤブツルアズキ) 採取の記

まる博 山本 美恵子

1 はじめに

令和3年5月、村図書館の雑誌の記事中に「ワイルド作物ハンターの『野生アズキ』探訪記」という記事を見つけました。著者のワイルド作物ハンターさんはヤブツルアズキを発見するまで自宅周辺、近県まで探すこと2年。それでも見つからなくて種を買おうかと思ったそうです。念のため農研機構・ジーンバンクで検索したところなんと自宅近くにもあることがわかり無事ヤブツルアズキを採取し食べることができたそうです。

田んぼのあぜ道などでよく目にするらしく、野生味のある風味で市販のアズキよりもおいしいそうで、さらには縄文人も食べていたらしいという事も書かれています。

この記事を読み、自分の住む周辺にも本当にあるのか？

そんな簡単に見つかるものだろうか？興味を惹かれました。

現在のアズキの原種で、「縄文人も食べていた」という言葉に魅力を感じた私は、本物を見たい、食べたいと思いました。

必要なものは自分の労力とあきらめな心のみ。しかもタダで手に入る。

これはぜひ実行あるのみ。
そう思い立った日から私のヤブツルアズキ採取が始まりました。

〈ヤブツルアズキとは？〉

本州〜九州に生える栽培種であるアズ



▲ヤブツルアズキ 村松 令和3年8月

キの野生祖先種と言われています。つる性で他の植物などに巻き付き2mくらいになります。田んぼのあぜ道、草地、河川敷などに生えています。縄文土器の中から炭化したヤブツルアズキが見つかったことから、縄文時代にはヤブツルアズキを食べていたことが分かっています。意外なことに、北海道、青森、沖縄ではまだ見つからないそうです。

2 ヤブツルアズキをついに発見

令和3年5月から、ヤブツルアズキを見つける旅が始まりました。

田んぼや藪にヤブツルアズキが多いというのですが、その中でも「私自身の移動が簡単」に見つける「採る」が一緒に

き、継続が可能で、自分に無理がないことという条件クリアは必須というわけで、調査場所は「細浦」を中心とした約5〜7kmの私のジョギングコースに決定しました。

花が咲き始めると比較的に見つけやすいということですが、5月では葉しか確認できません。

まず、ネットでヤブツルアズキの葉の形を確認し自宅に持ち帰って調べること数回、何となくこれではないかとわかり始めました。

ジョギングコースのなかで4か所くらい候補がありました。が、実際に本物なのか確信が持てませんでした。

8月24日、遂に黄色い花と緑のサヤがいるのを発見。さっそく、写真に撮り「歴史と未来の交流館」で安嶋館長に見て頂いたところ、「ヤブツルアズキ」とのこと。

目の前が突然開けた感じでした。その後、発見箇所は8か所に増え、あとはサヤが黒く成熟するのを待つて採集するのみです。

花を確認してから約1か月後の9月28日。黒くなっているサヤを発見。それから53日間、ひたすら成熟したサヤ集めの日々が始まりました。

ヤブツルアズキの生えている範囲はそれぞれ大小あり、数十mに及ぶところや数メートルの場所もあります。あまり細か

くするとわかりにくいため近場で生えている場所は1か所に数えました。例えば、村松小近くは4か所ありましたが、近場のため1か所と数えました。

調査の結果、ヤブツルアズキの生息箇所は、田んぼの周辺が4か所、丘陵地2か所、元田んぼ1か所、道路の脇1か所の計8箇所であることがわかりました。

その内、期間中に開発で消失した場所1か所・除草剤の使用でなくなりました場所1か所、刈り取られた場所2か所がありました。

3 ヤブツルアズキを採取

黒くなったサヤをひたすら集め自宅に持ち帰り空き箱に入れ、不織布をかぶせたくえ濡れ縁で太陽の光をたっぷり浴びてもらいました。

自然にサヤがはじけるようにしてみました。が、天気の良い日はパン、パンとサヤのはじける音が頻発し、不織布の隙間を狙ったかのように種子が1mくらい外に飛び出し、その跳躍力に感心させられました。濡れ縁の下など、なぜ、こんなところにも思うような場所にも飛び出していました。

種子は小さく米粒くらい大きさで依の様な形をしています。サヤは、はじけるとばねの様にくると丸まってしまします。ここが、栽培種のアズキと違うところです。

サヤから取り出した種子は良く乾燥させ、密閉容器で保存しました。

種子の採取期間は、9月28日から11月22日の53日間天候不順や私用でできない日もありました。

採取したヤブツルアズキの総量…
1418g(1.8しぼん1本)
採取する私に「何を集めているんですか?」と聞いてきた人…3名

4 ヤブツルアズキを料理する

アズキご飯、おはぎ、お汁粉の3種類を試してみました。

結果、アズキご飯は大失敗でした。1合の米に50gの種子を混ぜ約74分掛け電気釜で普通に炊いてみたところ、種子一粒一粒が自分を主張し、噛んでいるという感触がはつきりわかるようなご飯になり、中にはガチと石を噛んだかとか口から出してみたら硬いままの種子が出てきて一機に食欲を失うという結果になりました。後日、調べてみると数回、煮こぼしたりささげなどと一緒に炊くのが良い様です。

おはぎ、お



▲お汁粉



▲おはぎ



▲アズキご飯

汁粉はごはんの結果を踏まえ、文明の利器である「圧力なべ」に助けを求めました。150gの種子をよく洗い、沸騰しておもりが動き始めてから5分放置。
圧が下がって中を見てみると、ふっくら柔らかくなっていました。別鍋に半分づつ、取り分けお砂糖少なめで潰しながらおはぎ用餡、お汁粉用餡に調理。

家人、知人に試食してもらったところ、別にまずくはないと。私も食べてみたところ、感動に震えるような味ではなかったが、アズキである、確かにアズキだと実感できる風味でした。

個人的にはおはぎよりもお汁粉のほうがあっているようにも思います。

5 調査を終えて

ヤブツルアズキの採取は思ったよりも大変な労力で途中、いつまでこんなこと続けるんだらうと心折れそうになりました。でも、この時もヤブツルアズキは成長を続けており、今あきらめるわけには行かないと変な使命感で頑張ることができました。

見て、食べたかったヤブツルアズキに出会えたことは、とてもうれしい出来事でした。また、農研機構ジーンバンクでは研究教育、種子の保存のために野生アズキ及び大豆を集めているのを知りさっそくヤブツルアズキと野生大豆の種子を送付しました。10月29日無事受け取りました。ジーンバンクに登録して次年度に種子増殖と特性評価を実施します」とのお返事をいただきました。

東海村で育った種子が保存できることにほっとすると同時にかわいい子供を旅立たせたような気持ちです。

今回発見できた8か所も宅地

に影響でこれから先また、姿をみせてくれるのかは不明です。その中で「農研機構ジーンバンク」を偶然知り、種子を保管してもらえたことは大きな安心材料でした。

今回発見できた8か所も宅地

6 今回の成果

見つけれないのではないかと思っていた「ヤブツルアズキ」を村内それも自宅周辺で8か所も発見できたのは大きな喜びでした。

今回、採取しながら感じたことが数点あります。

実際に「ヤブツルアズキ」を調理し、食べてみてふっくらとした食感や味はアズキそのものでした。もう一つの原種である「野生ダイズ」も食べてみようかとおもいましたが、あまりの小ささに断念しました。縄文時代の人々は「ヤブツルアズキ」を生や茹でてたべていたのではないのでしょうか。

黒く熟した実は小さいうえに飛び散るので、採取が面倒です。そして茹でるのも時間がかかります。青いサヤのままなら豆は指で潰せるくらい柔らかいので、生食が可能です。もしくは水または汲んできた海水で茹でれば「枝豆」みたいに美味だったのではないかと感じました。

今回発見できた8か所も宅地

に影響でこれから先また、姿をみせてくれるのかは不明です。その中で「農研機構ジーンバンク」を偶然知り、種子を保管してもらえたことは大きな安心材料でした。

今回発見できた8か所も宅地

に影響でこれから先また、姿をみせてくれるのかは不明です。その中で「農研機構ジーンバンク」を偶然知り、種子を保管してもらえたことは大きな安心材料でした。

今回発見できた8か所も宅地

に影響でこれから先また、姿をみせてくれるのかは不明です。その中で「農研機構ジーンバンク」を偶然知り、種子を保管してもらえたことは大きな安心材料でした。

今回発見できた8か所も宅地

に影響でこれから先また、姿をみせてくれるのかは不明です。その中で「農研機構ジーンバンク」を偶然知り、種子を保管してもらえたことは大きな安心材料でした。



ヤブツルアズキの確認地(令和3年調査)

歴史と未来の交流館開館記念講演会

開館を記念して、東海村の自然・文化芸術・歴史・考古・民俗の基礎を築いた先生についての講演会を開催しました。

彫刻家山崎猛と東海村（11月7日開催）

北沢 努（彫刻家・東海ステーションギャラリー企画員・茨城大学非常勤講師）

彫刻家の北沢努と申します。本日は山崎先生と東海村ということで講演をさせていただきます。第1回目の講演会ということで緊張しておりますがどうぞよろしくお願いたします。

それでは、まず先生の経歴を振り返っていききたいと思います。

山崎猛先生は1930年に高萩市で生まれました。

日立で代用教員、茨城大学を卒業してから高萩中、秋山中で代用教員、その後茨城大学の助手となりました。その後、東海村には1964年に転居されたよう

です。1955年頃から一陽会に出品を始め、1960年にはとうりゃんせの像を制作しました。

これは先生が初めて委嘱され制作された作品で、先生がちょうど30歳の時でした。

1963年、上野桜木町の木内克アトリエを訪問し（現在、孫の明氏在住）、木内克から粘土塑造の指導を受けたと聞いております。その後、茨城大学で助手・講師として活躍される中、1972年にはイタリアへ留学し、現代彫刻の旗手ペリクレ・ファッツィーニに師事されました。そして1978年に茨城大学教授になられ

1980年代、国内公募彫刻コンクールで受賞されます。当時、先生は54歳で、彫刻家として遅いデビューだったということをお聞きします。

私は学生の時、彫刻も何も分からない時期でしたが、山崎先生から「私でさえ54歳のデビューで遅かったんだから、君たちも焦らずに頑張るように」との激励を受けたことを覚えております。

一方で、先生は茨城大学で学生と一緒に大きな作品を制作し、それを外に設置しようというところで彫刻を野外に設置する活動を始めました。それが先生自身の制作にもつながっているのかなと思います。自分自身の為というよりは、若い我々学生の作品も外に出して見てもらう機会を与えてくれました。

先生は、いつも口癖のように、「若い学生に刺激をうけている、それが自分の作品づくりに影響している」と言っていました。私は先生は芸術家ですが、同時に教育者だったと感じています。

先生は、68歳で惜しくもお亡くなりになりましたが、同時期に故郷の高萩市に展示室が開設されました。高萩市教育委員会の方々が開設に尽力され、森林公園たかほぎグリーンミュージアムには、先生の作品

が常設展示されております。先生は高萩市出身なので、市内には多くの作品があります。

さて、次に、東海村と先生との関わりを見ていきたいと思います。

先生が東海村に転居されたのは1964年頃です。

その後、1984年頃、村松虚空蔵堂で木内克の作品「鬼の首」を発見します。これがその後の野外彫刻展のきっかけとなり、その後の先生の活動につながっていくことになりました。

木内克さんは、水戸市出身の彫刻家です。山崎先生はイタリアへ留学されますが、その前に木内克のアトリエを訪問し指導を受けられ、先生は良く自分には師匠は二人いる、日本の師匠が木内克であり、イタリアの師匠がファッツィーニであると語っていました。

そういうわけで、東海村で木内克の「鬼の首」を発見した時の喜びは大変なものだったようです。

「鬼の首」という作品なのですが、茨城県近代美術館に収蔵されている作品と同じ型から制作したテラコッタ作品です。これが村松山虚空蔵堂の原家にありました。「鬼の首」がなぜ原家にあったのかというのは、山崎先生自身が調べています。木内克のお兄さんのお嫁さん「さと」さ

んが東海村出身だったようです。その縁があり、さとさんの義理の弟である木内克が東海村に訪ねてきたようです。その際にさとさんの御実家にお土産として持参されたのではないかと考えられています。

さとさんはとても裕福な家のご出身だったそうです。木内克は売れるまで苦労した彫刻家ですから、さとさんの御実家から支援を受けていたのではないかという話を聞いたことがあります。そのため、御礼として自分の作品を届けたのではないかと考えられます。

その木内克の「鬼の首」発見をきっかけにして、東海村で木内克大賞野外彫刻展が開催されるきっかけになったようです。



山崎先生は水戸出身の彫刻家であり自分の師匠である木内克の偉業を世に広めたいという思いもあったと思います。当時、木内克はそこまで評価されておらず、どちらかというと日展の先生方が評価されていたと聞きました。なので、茨城県出身でこれだけ素晴らしい彫刻家がいるのだということを広めたいと考えたのかもかもしれません。

そして、それが全国公募の木内克大賞野外彫刻展が東海村で開催された経緯になります。

しかし、先生が一番大切にしていたことは、「新人作家」「若手作家」を育てたいという想いです。「木内克」は単なるきっかけであつたと聞きました。

当時、山崎先生の考えでは、若い彫刻家を育てようという考えで、彫刻展は決して

木内克の作品を展示するという趣旨ではなく、水戸市生まれの木内克の名前を借りて、新人彫刻家の発表の舞台、登竜門にしよう、という考えがあったようです。

山崎先生が東海村にいられてからは、自分の活動だけではなく、新人作家を育てることを第一目標とし、そしてその場を東海村に決めていました。

師匠の作品が見つかった場でもあり、ご自身がお住まいであった東海村は、地理的にもとても良い環境であり、役場の方々もとても理解があり、協力的だったと聞いています。そこで東海村を舞台に新人作家の育成をしようとしたのではないかと思います。

先生については1989年に常陽芸文センターで映像を作られているのでこちらにも参考にさせていただければと思います。

私の印象としては、この映像に出てくる先生そのまま、非常にやわらかくて人なつっこい方でした。えらそうにしないで、学生の私達とも同じ目線で話をしてくださる気さくな先生でした。

さて、では次に作品画像を見ながらお話ししたいと思います。

山崎先生はブロンズとテラコッタ彫刻の作家ということで認知されているのではないかと思います。

これは、ブロンズ像でタイトルが「ふれあい」、54歳の時に入賞された作品です。東海文化センターの駐車場に設置されています。



次に、これは先生が30歳の時、初めて依頼されて制作した作品「とうりゃんせの像」です。北茨城市の二ツ島、6号国道沿いにあります。ぜひ、見ていただければと思います。

また、これは東海村の照沼小学校と石神小学校に設置された作品ですね。



次に、この3点は、ふれあいの森公園のメインとなる作品です。

これは三木俊治さん作「行列」で、ブロンズと鉄でできています。



これは津野充聡さん作「WIND」で、ブロンズでできています。



これは牛尾啓三さん作「空間のメビウス」、石でできています。



この3点はふれあいロード彫刻展の入賞作品です。このふれあいロード彫刻展とは、ふれあいの森公園建設の際に、植木だけではなく芸術作品を置き、親しまれる

公園を作ろうということで企画されたもので、その後の木内克野外彫刻展につながる前段階の彫刻展です。その結果この3点が選ばれて設置されました。現在は公園の風景となっており親しまれています。

では次に、木内克野外彫刻展の作品をいくつかご紹介したいと思います。

これらは村に設置されている作品です。「天をさぐる」

戸谷真也さんが作られ、回漕ヶ浦公園に設置され、コールドン鋼という野外でも耐えられる鉄で作られています。



「橋円」とぎれた会話」

荻野弘一さんが制作された作品で、石でできています。また当時の実行委員会を見ると、須藤村長を始めとして多くの方々関わっていることが分かります。本日お集まりの皆様の中にも、いらっしゃると思いますが、私もこの当時はまだ学生アルバイトでこの彫刻展を手伝った記憶があります。山崎先生から、東海村ですごい展覧会をやるんだと言われたことを覚えて



さて、次にピアザムーゼについてお話ししたいと思います。

現在は、「茨城東病院」ですが、当時は「晴嵐荘病院」院長先生に山崎先生が声を

かけ、結核を患う患者さんが散歩をする歩道に彫刻を設置し「アートセラピー」という活動を始めました。

彫刻は学生や一陽会のメンバーに声をかけて設置し、イタリア語で「広場美術館」を意味する「ピアッツァ・ムーゼオ」という言葉を英語風に直して呼びやすく「ピアザムーゼ」と名付けました。彫刻は大きな作品になると倒れないようにしないといけないのですが、先生はヒューム管を使いました。このヒューム管は先生のアイディアで、地元の建設業者さんが安く提供して、病院の工事のついでに設置し、手作りの彫刻ロードが完成しました。「彫刻が環境を作る」という言葉がありますが、1回目に20点くらい設置しようなのですが、遊歩道周囲もきれいになり、それまで散歩をしなかった患者さんも彫刻を指して歩くようになったそうです。このことは、彫刻が病気を治す手伝い、精神的な癒しの彫刻ロードができたからではないかと思ひ、画期的な取り組みだったのではないかと思います。そしてこの「ピアザムーゼ」が先生最後の活動となりました。

さて、最後に先生の御遺志を引き継いでというお話になります。

東海ステーションギャラリーは作品を展示する場としてオープンしたのですが、先生が亡くなられた次の年から、一般住民の方を対象にして始まったのがブロンズ彫刻講座です。その前身は、常陸太田市春友彫刻の森工芸センターにあります。そこには陶芸の創作活動ができる場所があり、先生が小さな作品の市民実技

講座を始め、私もその手伝いをした経験がありました。

先生が亡くなられた翌年の平成11年から、私自身が先生の遺志を引き継いで一般の方に彫刻を教える講座を始めることになりました。先生は亡くなられていたのですが、私がこの講座を始めたことは先生が知る由もないわけですが、もしかしたら今頃天国で、「もっとしっかりとやれ」なんて言っているかもしれません。

実際に講座で住民の方々が作った作品をステーションギャラリーで展示をしました。皆さん非常によく作っていて、レベル的にも山崎先生に近づいていると感じました。また、こちらは、阿漕ヶ浦公園の彫刻作品を洗浄している様子です。



木内克野外彫刻展で受賞、奇贈された作品が40点ほど東海村にあり、それを良い状態で鑑賞したいという声が生民からありました。そこで「彫刻洗い隊」というボランティアを結成して、洗浄のやり方も専門家からアドバイスを受けて2年に1回のペースで専用の洗剤で洗って、蜜蝋をぬり、錆びないようにしています。彫刻は設置すると安心してしまってもそのままになってしまいうことが多くありますが、東海村ではこのように村の財産である彫刻作品を大切にしようという村民の方々により維持管理されていますので、100年、200年先も良い状態

で鑑賞することができると思います。

このように、創作の場や展示の場があること、役場の職員の方々も協力的であること、そして彫刻や芸術を大切にしている村民の方々がいることを思うと、山崎先生の情熱が今日までしっかりと引き継がれていると感じます。

私も山崎先生から教えを受けた身として、先生の思いを伝える役割があるのだと感じています。実は、まだ山崎先生がこの辺にいらるようで、いつも声が聞こえてくるようです。

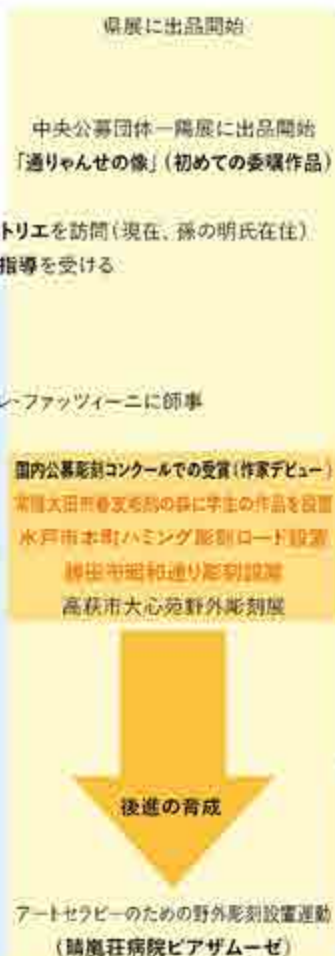
最後に、東海村内至る所に彫刻が設置されています。個人の敷地内以外はいつても鑑賞して楽しんでいただければと思います。

山崎猛と東海村

山崎猛 年譜

東海村でのアートイベント

- 1930年 茨城県高萩市生まれ
- 1949年 代用教員(日立市御形小)
- 1950年 茨城大学入学
- 1952年
- 1954年 茨城大学卒業
代用教員(高萩中)
- 1955年
- 1960年 代用教員(秋山中)
- 1963年 茨城大学助手
上野桜木町の木内克アトリエを訪問(現在、孫の明氏在住)
木内克から粘土塑造の指導を受ける
- 1964年 東海村に転居
- 1971年 茨城大学助教授
- 1972年 イタリア留学
現代彫刻の旗手ペリクレ・ファツィーニに師事
- 1978年 茨城大学教授
- 1984年
- 1988年
- 1990年
- 1992年
- 1994年
- 1995年 茨城大学退官
紺綬褒章受章
- 1996年 第32回茨城賞受賞
- 1997年
- 1998年 8月3日逝去
高萩市森林公園グリーンミュージアム内に山崎猛作品展示室開設
- 2008年 1月 没後10年山崎猛展—テラコッタとブロンズの女たち—開催



自己研鑽

新人彫刻家の育成

東海ステーションギャラリー館長
ギャラリー運営、企画展を担当

地域作家の支援

村松空蔵堂の原案にて木内克作品「鬼の首」を複製
木内克の兄(重三)の嫁(佐登)が東海村出身と判明

アートロード展

- 東海村ふれあいロード彫刻展
- 4月 第1回木内克大賞野外彫刻展
大学恩師・稲村退三先生絵画作品を東海村へ寄贈
東海ステーションギャラリー開館
開館記念・稲村退三展
- 11月 第2回木内克大賞野外彫刻展
東海駅東口に木内克作品「エーゲ海に捧ぐ」建立
電車を待つ彫刻たち展
- 5月 第3回木内克大賞野外彫刻展

1月 東海ステーションギャラリー開館15周年

東海村内野外彫刻設置図面

1 村役場

- 人というもの(左上)
- エネルギー・太陽からも(右上)
- 夏の夜空(下)

2 舟石川コミュニティセンター

- 緑の風(左)
- 雲のかかる街(右)

16 石神小

- 希望

15 照沼小

- なかよしこよし

14 東海中

- 希望の像

3 駅西児童公園

- ゆきんこ(左上)
- 掌(右上)
- 犬(下)

【電車を待つ彫刻たち展】



13 白方公園

- とぎれた会話

12 駅東口

- ユーグ海に捧ぐ(左上)
- ライダートリックスター(右上)
- 残像(左中)
- 大地の番人(右中)
- 待つかたち(下)

【電車を待つ彫刻たち展】

4 ふれあいの森公園

- 空間のメビウス(左上)
- WIND(右上)
- 旅人(左中)
- トロイメライ(右中)
- 行列(左下)
- 詩人(右下)

5 図書館

- 初恋(左)
- 文月の女(中)
- 風の家族(右)

11 阿漕ヶ浦公園

- 残像Ⅱ(上)
- 舟を造る人々(左中)
- 天を乞う者(右中)
- まどろむ(左下)
- Flower(右下)

6 東海文化センター

- 電車ごっこ(左)
- ふれあい(右)

7 中丸コミュニティセンター

- 山

10 村松コミュニティセンター

- 円盤上の人物

8 須和間公園

- 火を守る女神

9 茨城東病院(旧晴嵐荘病院)

- ピアザムーゼ

彫刻散歩人



牛尾 啓三
「空間のメビウス」

御影石の作品です。
石なので、金属のように錆びたりせず洗うだけでいいので野外に向いています。
風雨に耐えられる自然素材を用いた彫刻らしい彫刻ですね。
形もモダンで素晴らしいと思います。
東海村ふれあいロード彫刻展の三等賞、茨城新聞社賞受賞作品です。



津野 充聡
「WIND」

東海村ふれあいロード彫刻展の二等賞であるふれあい彫刻賞受賞作品です。
ブロンズでできています。彫刻洗い隊が洗っていますので非常にきれいな状態です。
県内野外彫刻でこんなにきれいな状態は他にありません。胸を張って「東海村の美しい彫刻を見に来てください!」と言えますね。



三木 俊治
「行列」

コルテン鋼とブロンズでできていて野外でも長持ちします。現在は図書館が改築によって後ろにあります。設置当時はありませんでしたので、日当たりが悪く日陰になってしまいました。



池田 宗弘
「旅人(夏)」

材料は真鍮です。真鍮は五円玉ですので金色をしていました。金色がやがて茶色が濃くなり黒くなります。鉄だと錆びて朽ちることもあります。ブロンズと真鍮は長持ちします。

山崎先生は日展の彫刻のような美しい裸婦像だけでなく、色々な作風があってよいという考えがありました。図らずも、木内克大賞野外彫刻展にはこういう独創的な作品が出品されて評価されました。第2回展の一等賞です。

真鍮もブロンズと同様、弱アルカリ性洗剤で洗って置螺を塗っています。この作品も、100年以上大事にしていきたい作品ですね。



梅原 正夫
「トロイメライ」

これは第1回木内克大賞野外彫刻展の入選作です。

三菱原子燃料により買い上げられ、村に寄贈、設置されました。

これもブロンズでできています。

東海文化センターでも音楽コンサートなどの催しものがあるので、ぴったりの作品ですね。日当たりもよく状態もきれいです。

山崎先生も野外彫刻の設置場所はとても気にされていて、南向きか東向きが良いと言っていました。日当たりがよいと雨にぬれても乾くのが早いので彫刻にはとても良いようです。



山崎 猛
「ふれあい」

先生の出世作で54歳の時の公募展受賞デビュー作です。

ブロンズでできています。

母娘のようですが、姉妹です。

非常にやさしい作品ですね。



綿引 道郎
「詩人—詩想の時」

コルテン鋼で制作されています。野外でも長持ちします。図書館とマッチしている作品ですね。

『民俗学者藤田稔先生と東海村』（2月20日開催）

林 圭史（茨城県立歴史館主任学芸員）

このような機会を与えていただきありがとうございます。新型コロナウイルス感染症拡大の世の中で、今はイベントや講演会一つ行うにも調整が難しい時代になってしまいました。そのような中で生進学習課の皆様にはご苦労をされてこの場を作っていただきました。ありがとうございます。

さて、これからお話するのは「民俗学者藤田稔先生と東海村」という題名になっております。

藤田稔先生は民俗学の研究者であり、県内の高校の先生をされていた方です。

本日の構成としては、まず民俗学者の写真資料ということで、藤田先生以外の民俗学者の撮影した写真についての例をご紹介してから、具体的に藤田先生がどういう研究をされていたのか、その特徴についてお話できればと思います。そして最後に藤田先生の研究の視点を活かして交流館の今後の活動のヒントを私なりに考えたところをお話できればと思います。

さて、私は皆様にお話するときいつもこの問いを投げかけるのですが、民俗学と書いて「民俗」と「民族」のどちらの漢字をイメージされますか？

今、「民族」学というのはいまあまり使われなくなり、文化人類学と呼ばれることが多くなりました。本日は民俗という字をイメージして聞いていただければと思います。

民俗学ですが、民間に伝わってきた衣食住の文化や、祭礼、生活の移り変わり、モノの移り変わり、考え方やモノの見方を明

らかにしていく学問です。民俗学の調査フィールドワークともいいますが、それは、地域のお年寄りから体験談などを聞き取りそれを映像や写真、録音機で記録したり、祭礼や行事を記録したりします。

録音する、写真に残す、映像を撮るといふのはお話を忘れないようにという面と、その映像記録自体が資料であると民俗学では考えます。

さて、民俗学者の写真資料として今回ご紹介したいのは、宮本常一という有名な民俗学者です。この人は旅する民俗学者、旅する巨人などと呼ばれ、全国を歩き、その距離は地球4周分を歩いたと言われる明治生まれの方です。渋沢敏三主催の研究所で昭和10年代から活躍されました。彼が撮影した写真は約10万点が出身地の山口県に残され公開されています。彼は茨城にも訪れており昭和30年代の茨城を写した写真が約160枚残されています。しかし、具体的な市町村名や詳しい内容まで読み取れる資料は少ないです。もちろんこれは宮本常一が茨城県を中心に調査をしていたわけでは無いということも大いに関係していると思います。

最近では渋沢敏三という名前を紹介するのが楽になりました。現在大河ドラマでも取り上げられている渋沢栄一の孫、それが渋沢敏三で、民俗学の先駆者です。民俗学という柳田国男、折口信夫が浮かぶ方もいると思いますが渋沢敏三も日本の民俗学の基礎をつくった有名な方です。その渋沢敏三の研究所で宮本常一は調査

をしていました。

さて、この残された10万点の写真資料をどのように活用していくかということも博物館にとっては大きな課題です。山口県や新潟県の博物館で、写真資料を展示やまちづくりを活用するなど、民俗学者の写真資料の活用方法は注目されています。

では次に藤田稔先生の足跡を紹介したいと思います。藤田先生は大正時代、常陸大宮市に生まれ、平成25年にお亡くなりになりました。主には茨城県で高校の教員をしながら民俗学の研究をなされていた方です。

藤田先生と民俗学の出会いですが、和歌森太郎という民俗学者であり歴史学者、この方と出会って民俗学を志すようになったと言われています。和歌森太郎から教わった民俗学を故郷に戻って広めていく、これ自身が研究テーマになりうる面白い題材なのですが、今回はそのことには触れません。

昭和23年、まだ先生が20代のころ、太田一高に赴任されまして、社会科の先生をなさっていました。その活動で注目されるのは、発掘調査、民俗調査、聞き取り調査を生徒と一緒にやって研究会誌にまとめていくということをされていたことです。これは水戸一高に赴任されてからも一緒に県内各地の調査を行いまとめていかれました。先生が40代のころ、今は茨城民俗学会というものがありますが、この学会の発足に関わりました。

また昭和30年代の最後の方になります。全国的に民俗調査が行われるようになります。この時に文部省の緊急民俗調査が行われ、その時茨城を代表して、調査執筆を藤

田先生がリードされました。この時の調査が著作に色々と反映されていると思います。

藤田先生の研究成果を言い出せば数多くありますが、先生は本当に県内各地を調査されています。特に、自治体史を編纂していく中で平成の初期まで県内全域を調査されていました。

面白い取り組みもされています。例えば、学校の中で農具を展示したり、民俗芸能を地域の方とおこなうということもやっていました。

藤田先生の残した写真は2万点ほどあります。

その中でデジタル化ができてきているのが4000点で、その4000点の中から、内容、撮影地を見ていく作業を行っています。その写真は白黒からカラー写真まで、封筒に書かれた年月日を基にして整理すると、昭和29年から平成7年までの写真があります。

その多くが民俗調査で収集された資料で、東海村に関わるものは確認できているもので約70点ほどございます。これは後ほど少し見ていただきたいと思います。

さて藤田先生と東海村との関わりと言いますと、藤田先生は、東海高校の初代の学校長でした。

それが昭和52年のことです。東海高校の10周年記念誌の中で藤田先生は当時のことを懐かしく振り返っておられます。それを読むと、新しい学校の発足という混乱と苦労がよく表れています。例えば、開校してからも工事が続いていたことであつたり、公民館が臨時の職員室であつたり、公民館の前庭で合格者の招集をしたな

ど、そういう大変な思いがありながらも新しい学校を作る喜びや楽しさ、そういう雰囲気を感じていくように感じました。

また、その中でもう一つ印象的だったのは、卒業式の式次で生徒に言った「一隅を照らす人になれ」という言葉です。この言葉は先生の晩年も一つの座右の銘となっていたことは他の文章にも書いてあります。生徒にも希望をもって、一隅を照らす人になりなさいとおっしゃっていたようです。

また東海高校在任中、村内にある石仏石塔調査をなさり一冊の本『東海村の石仏石塔』にまとめています。



もしかしたら調査に関わった方も今日いらっしやるのかもしれない。

この調査は先生が一人でされたわけではありません。ここからが非常に重要なのですが、村民の皆さんと一緒に、あるいは講座に参加された方と一緒に一冊の本にまとめられました。本を読むと分かるのですが、当時このように本にまとめるという作業は全く予定されていなかったそうです。講座に参加されたみなさんの熱

意によりこの本を作る、調査するということが講座が始まってから決まったようです。非常に熱意をもった方々が参加されていたことが分かります。この本は本当にすごい石仏石塔の調査となっていて、もちろん全部ではないと思いますが村内全域のものが網羅されています。その成果として藤田先生は東北の特徴と同じく建立年代は比較的新しいですが、建立の母体となった講がまだ残っているところが素晴らしいと書かれており、詳しくは『東海村の石仏石塔』という本をみていただければと思います。

石仏石塔については、昭和20年代の写真にも多く残されており、先生の最初の方の関心事だったことが分かります。藤田先生の講座の参加者約40名が行い、スケジュールが4月に講座が始まり、6・7月に調査、原稿を書き、11月には本を出していますので、本当に熱心に行うと同時に、編集をされた方も役所の担当の方もご苦労があったのではと想像します。

その成果が『東海村史民俗編』に反映されているのです。

実際に藤田先生は、会員の手によって調査から刊行まで行われたがその熱意に敬服するということを強調して書かれています。特に近代化が進んでいる中、東海村が激しく移り変わる中で故郷の心が今もいきづいてきているのだとおっしゃられています。

もう一つ、藤田先生と東海村を考える上で、『東海村史民俗編』をあげなくてははいけません。

その監修を藤田先生が務めており、内容も、分かりやすい表現を使い、地元の方と

一緒に作り上げたということが伝わってくる本です。

実は、民俗編が自治体史の中に取り入れられるのはそこまで古いことではありません。

当時の『勝田市史』を作る中で民俗編が取り入れられたというのが大きな転機期だと言われています。その影響もあり、県内で市町村史の民俗編が作られていくようになり、県内ではなく全国的な影響も与えました。それが1975年の頃で、『東海村史』は1992年刊行です。基礎的な調査はもつと長い年月おこなっていたと思いますが、その流れにあったと思います。藤田先生が振り返っているように、この民俗編は、東海村始まって以来の大きな学術調査でした。全戸に何回も何回もアンケート調査等を行い、基礎データを積み上げ、大規模に調査されました。その成果が『東海村史民俗編』にまとまっています。

さて、具体的に4000点の中で約70点ある写真は昭和60年から平成初期が多く『東海村史』の編集に関わったものが多いと考えられます。この写真を見てみると、石仏を写したものであったり、石碑の後ろにある大供養の卒塔婆を写したものと、目立たないものを写真に意図的に写しこんでいます。また、真弓馬の製作工程や、たぶん真鍮だと思おうのですが敷物の製作工程なども写しています。暮らしの中の何気ない一部を切り取っていることが分かります。言葉で説明しようと思うと難しいですが、こうやって写真を残すことで伝わりやすさね。

また、葬式の仕方やお墓のまつり方、東

海村ではありませんが土葬時代の様子を克明に記録したのも藤田写真の中にはあります。お葬式の移り変わりなどはなかなか写真で記録しないので、貴重な記録です。

また子どもたちが行事に参加されている様子を撮影している写真が多いのも特徴です。子供に関わる行事が多いということもありますが、先生の関心でもあったようです。

先生が撮影した東海村の70点の中で、分かりやすいまとまりがあったのでご紹介します。

お正月を迎える準備から2月の行事です。まずは平成3年に撮影された「しめ縄づくり」の写真です。その当時のどういものが使われていたのか、その準備の様子が克明に記されています。また、外にカマドがあったり、神棚飾りや節分飾りなど1枚をじっくり見ている中でも当時の生活の様子が分かります。やはり、記憶にしか、残りにくいものが写真として残されるという面がありますね。

さて、私はいつもクイズを出すのですが、この写真を見ていつ撮影されたか分かりますか？という問題なのですが、これは目かご立てといって、庭先に目かごを立てている行事です。これは、撮影日がわからなくても、内容で撮影日を推測できるものです。長塚節の小説にも描かれるこの魔よけの行事は12月8日、2月8日どちらかだけ行ったり、両方行ったり地域によって色々ある行事です。また、これは襟掛けモ子といって子どもたちの成長を祝う行事で2月8日に行います。7歳以下が行うというのがポイントです。このモ子の数も家

や地域で数が違います。例えば、数え年+1などあって、自分の家ではこうだったというデータを集めるのも面白いのではありません。



▲エリカケモチ

このように、東海村に関わる約70点ほどの写真を見ると、今ではなくなつたお祭りや行事、家ごとの習わしなどが記録されています。ここから自分なりに気づいたことなのですが、やはり普通に行つていたものほど記録に残りにくいということがあります。

そういう意味でも藤田写真は大変貴重なものですね。また、葉をつかってモノをつくる、という手仕事の記録があるのも重要です。現在は作り手がいなくなり技術もなくなつてきました。日々の暮らしには不要になつてきた手仕事ですが、お祭や行事にはそれがないと成り立たないというものがあつて現在私達はホームセンターへ

買いに行つたりしますね。

それから、「昭和60年」ときいてどんなことを思い浮かべるか、ということも重要です。私にとっては、そんなに古くない、最近と思うかもしれませんが、ここにいらっしゃる方々の中でも、つい昨日の事のように思う方もいるかもしれません。ですが、子どもたちは「昭和60年」ときいた時にどのような感じでしょうか。今から約40年ほど前、それは子どもたちにとってはもう「昔」ですよ。私が子ども頃の頃祖母から戦争の話聞いた時にうまく時代のイメージがつかめなかつた感覚が、今の子どもたちにとっては昭和60年かもしれません。そう思うと、藤田写真は当時の生活・文化を記録したとても貴重な資料なのです。

次に、藤田先生の研究の特徴を少しだけ紹介したいと思います。藤田民俗学の特徴は、地図に民俗の事象をおとし、その民俗が分布するまとまりを把握していく、民俗文化圏の把握、民俗分布図を作成するというものです。

茨城の民俗文化はあつてどこで区分できると藤田先生はおっしゃっています。今でも私達は東北地域、関東地域という言い方をしている、聞きなれた生活の区分がもしもありません。しかしこの東北、関東というのは単に地理的な区分ではなく、文化的なまとまりがあると先生はおっしゃっています。そして、そこには文化的な同質性をとらえてまとめることができると述べられています。

例えば、浜降りという行事が茨城県内にあります。これは神輿を担いで川や海に降りる儀式で、金砂大祭礼が有名ですが、

この行事は東日本太平洋洋に分布しています。特に東日本に多く分布し、ヤンサマチなどもそうです。この浜降りをいつ開催するのかに注目すると、春に行うのが那珂川から北のエリア、他の地域は夏だったり四国九州は秋だったりします。那珂川が境界になつている事例です。また昔、田舎裏があつた時代、その田舎裏の席で主人が座る場所を何と呼ぶかという問いに対しては違うという事例があります。襟掛けモチやシブヌキがあるかどうかなど、他の民俗を見ても同様のことがいえます。このように、文化的な同質性でみていくと、あるまとまりが見えてきます。

東海村は東北型には位置しますが、グラデーションになつていて、完全に東北型ともいえないところがあるのかなと思います。これは、藤田先生がおっしゃるように那珂川と久慈川という二本の川の間には挟まれているという地域性がある、この二本の川が東海村の民俗文化を特徴づけていると言えます。

最後に藤田民俗学の二つのキーワードを紹介したいと思います。

一つは「不易流行」です。先生はよく、流行の中に不易のものをみつけるのが私なりの民俗学であると述べられています。もう一つは「民俗学と教育」です。

民俗学を生徒や市民と一緒に調べて調査しまとめていく。このようなことを熱心におこなっていました。特に校長という立場になつてからの意識の変化があつたと思います。

民謡の収集、わらべ歌、石仏石塔、その

中に庶民の、弱くもたくましく生きてきたあとをみいだそうとするまなざし、それが藤田先生の特徴的なまなざしとして言えるかと思っています。



▲子ども達と絵馬調査（左から2番目が藤田先生）

最後に、藤田先生の残した写真をどう活用していけるかというお話をしたいと思います。

先に紹介した大規模な調査とその過程でとられた写真がたくさんあります。その写真を使って、現在はどうなっているのか、そして当時の思い出など、これからの交流づくりに活用できる可能性が高いと感じます。

藤田先生のキーワードを使つていうと、写真の記録の中に、東海村の不易（変わらないもの）と流行（変わるもの）は何なのか。皆さんどのやりとりの中で見つけていけるのではないかなと思います。ありがとうございます。

《昆虫研究者 廣瀬誠と東海村（3月13日開催）》

廣瀬 誠（昆虫研究者・元東海村の自然調査団団長）

1 久慈川を渡る

皆さんこんにちは、廣瀬です。
東海村にきた最初のことなのですが、その今日は3月13日です。

私は、水戸の新荘小学校に通っていたのですが小学校4年生の3学期、昭和19年3月13日に私は母に連れられて、村松山虚空蔵の十三参りに加わりました。

水戸から常磐線で勝田、佐和、石神、大妻ときて、大妻で降り、当時は電車がありませんでしたから、電車で久慈浜まで行って久慈浜駅で降り、その後、道をずつと向渚に沿って歩いていくと割山という地があります。その割山の下、久慈川の岸に渡船場がありました。そこに母と姉と私、そして弟と妹の5人、それからどこかのおじさんたちが5人の計10人が座っていました。旗を振れば船が来るんだと教わって、母は対岸に向けて、白い手拭いを振ったのです。そうすると向こうから船がやってきました。向こう岸に行くのだろうと思ったのですが、久慈川の流れは向渚のところまで曲がっていて、まっすぐには横切れないのです。海の方へ流されてしまふのです。どうするのかなとおもったら船頭さんはずつと川上の方に船を進めて行くのです。どこに行くのかなと思っていいたら船頭さんは一生懸命船を漕いで川の真ん中まで行き、そこで漕ぐのを止めました。あとは川の流れに任せて岸に着いたのです。それを見ていて上手だなと思いました。

私が初めて東海村、当時は村松の地を踏んだ瞬間なのです。
私を迎えてくれた人物は、母の母、つまり祖母です。祖母は慶応生まれで小学校を出ていませんがとても物知りでした。母は長女で孫の私は長男でしたのでかわいがってくれました。よく来たね、今夜は美味しいものを食べさせてやるから一緒に来いと言われて、鬼下の裏の屋敷林の中へ行ってキノコ採りをやりました。キノコは、白いキノコで、名前をシヨウロと言います。ご飯の中に入れて炊いてキノコ飯を夕方私達に食べさせてくれました。おばば、と私は呼ぶのですが、鬼下のおばばは次の日にお参りに行くのだからきれいな恰好をしていかなければならないと言います。歩いていくのだから足の裏をよく洗いなさい、と。私は無精でして爪が伸びていたのでおばばが切ってくれました。そして、お前の爪だからもうとくとくよ、と言って、弟も姉の爪もそうですが、生紙で包んで神棚に上げ拜んでいました。そうして、翌日は、いいか子どもは足が丈夫じゃないといけないと言って新しい藁草履を用意してくれて、先頭になってテクテクと歩いて宿を通り虚空蔵尊まで皆元気に行きました。

テクテク歩いてもくたびれて、今覚えてるのは境内の銅でできた牛を撫でたというところだけです。その後、竹の枝に着いた福俵を一人一つずつもらいました。家に帰るまでは開けてはいけいと言われていたのに途中歩きながら食べてしまっ

て叱られたことは覚えていません。砂埃の道でした。
村には坂がたくさんあります。低い土地、鬼下から見ると特にそう見えるのかもありません。
夕方になると、船着き場に行きました。久慈川が流れてくる方向、西に日が沈むのです。夕日を眺めながら、おばばは「この川がおれらにいろんなものを運んでくるんだよな、ありがたい川だ、まこちゃん分かるか」と言いました。
今では祖母の顔もすっかり忘れてしまいましたがこの言葉と声はよく覚えています。
水戸の市街地の外れで暮らしていましたから、東海村での初体験は印象深く刻まれています。その後、数年、祖母からは春は夕ヶノコ掘り、夏はセミやホタルやドジョウやタニシの話など色々な話を聞いたものです。
やはり一番印象に残っているのは、洪水の日には久慈川の上流から色々なものが次々と流れてきたという凄惨な話です。

2 村の虫さまざま

虫の雑誌を詳しく調べてみると、東京市の昆虫趣味の会の機関誌『昆虫界』第1巻第2号（1933年4月）に水戸市の谷伴夫さんが「水戸附近の蝶」を発表しヒメシロテフ（原文のまま）について次のように書いた。那珂郡の湊、石神、勝田等に産し五月頃と八月頃とに採集される。と。
石神の松林の中で白い蝶ヒメシロテフウを採ったという記録で、このヒメシロテフウは久慈川流域では山の蝶なのです。平均海拔300mから高いところに育つマ

メ科の植物の葉を幼虫が食べる蝶が石神の松林にいた。普通は平地にはいない蝶の幼虫が、久慈川を下り河岸に流れついて村に来たのかな、と。
谷さんは石神での1931年5月3日に1♀の記録だけ残しているのです。その蝶の日付がなぜ分かるかというと、谷さんの標本は県内の博物館に残っています。そして自分の名前と採集の記録、地名と日付を書き残しました。現在残っているのはこの二頭だけです。約90年前の石神の蝶はどこから来たのでしょうか。
私は1950年の春、上小川から袋田の河川敷を見て歩きました。袋田の駅の花に蝶がいました。その後、上小川の鱒ヶ淵の草原にその蝶がいくつもいたのです。それを見てこの久慈川の下流の村松という地域は何か生きものたちが上流から流れてきたり寄ったりする種やかな地域だと思いつきました。
さて、村の昔の生き物の話をしたところで、次は現在の生き物の話をしていきます。



▲ミドリヒルの一種

久慈川の沖積地には広い水田がありま
す。そこには多彩な水生動物が生息して
いるのですが、私にとって一番珍しいも
の、これは環形動物ヒル類チスイヒルの
一種、通称ミドリヒルです。泥沼とか池
にいますのでなく、稲をつくる水田に
なりそうなく、きれいな水がある程度溜
まっているところにいます。

かつては水田に多産しましたが、農法
の現代化に伴って激減し、この型のヒル
は県内で採ってこいといわれてもおそら
くどこにもいないでしょう。

石神城の下の池とか、溜池のまわりで、
全然人がいらず農薬が流れこまない水域
にいます。化学薬品でこの皮膚が解けて
しまいます。

ヒルは雌雄同体です。二年目に卵のう
内に卵を生むのですが、幼個体になると
親の体外にでます。飼育するとこの親は
幼体の半数を食べてしまいます。このヒ
ルが何を食べて育つかというと稲のよう
な水の中の植物の白い根に着く小さな動
物や弱ったカエルやメダカ、フナなどの
魚から吸血します。このキレイな緑色は
アルコールの中に入れると緑が抜けて白
くなってしまう。

教育研修センターに勤めていた時、ヒ
ルを時々上司に見せるんですね。そうす
ると初めは珍しい、すごいねと言われる
んですが、その内、これの飼育が何の役に
立つのかと問われます。私達はこの生き
物を作ることができません。そして今A
Iだとか技術だとかが発展していますが、
人は地球上に生きていてる全ての生きもの
を遠ざかることができないのです。この草の
根や魚の血だけを食べている生き物が、

稲をつくる水田で永永と卵をうんで、共食
いしながらも次の世代を残し続けている
。人の生活地の真つただ中で小さな生
命をつなぎつなぎ生きていくという共生
の系統が私には面白いのです。人が頼ん
だわけでもなく、鬼下の田が生んだも
のでもなく、そこに人の生活とは無関係
ではあるが共に地球上に存在するもの
命を認める人がいるからこれの生命体が
あることが語れるのです。一つのもの
発見は、目の前の相手が指し示してくれ
る情報をこちらが応えないと相手の持つ
ている特徴や個性はわからないでしょ
う。ヒルだって昼寝している動物ではな
いのです。タニシについても面白い話
ができますが…。



▲オオウメガサソウの花の上のアリが受粉者だ。

さて、その分かったよう分らない
もの一つ。防風林の林床に花咲く美
い花物語。

村はおよそ北緯36度28分という地に位
置していますが、この花はより北国が好
みます。寒地性植物で東海村が南限の地
になると故茨城大学名誉教授鈴木昌友博
士は記載しましたが今は南下してひたち
なか市が最南限の地か。

夏至の頃に花が咲き、ウメの花に似て
いるという、オオウメガサソウは可憐。

花びらが5枚あり、真ん中に大きな雄蕊
があります。蕊のまわりを囲むのは雄蕊
の先にある花粉が入っている葯という袋。
花粉がこぼれて雄蕊の頭につくと受粉で
きます。コケ類が密生する地表には何種
類かのアリがいます。ここにはシワアリ
というアリもいます。アリはこの花が咲
くと、においなのか、私達には分からない
情報を感じて細い茎を上がってきて、花
のまわりをグルグル歩きまくり葯をかん
だり雄蕊に登ったりしてアリは花粉を
とって巣に運ぶのです。アリにとっては
花粉は食物なのです。でもそんなことは
ないが全部持って行ってしまおうと花粉が
雌蕊の柱頭に着かないので受精ができな
くなってしまふ。しかし、アリたちがいな
くなると次にダンゴムシ類がきます。ダ
ンゴムシとワラジムシ類の体は大きい
すから、歩き回って花粉が雌蕊の柱頭につ
いて受粉できるのです。この花は蝶やハ
チ、アブでは駄目なのです。肢があつて花の
上で動き回ってもらわれないと種子を残せな
いのです。虫媒花の一つで、菌根植物です。

さて、この花は東海村・ひたちなか市
が南限の植物です。

100年ほど前から村の虚空蔵堂の後
ろの林床にあつて珍しいと大正時代には
学界に認められた植物ですが、花の形態や

花粉の発育の記録はあつても花を訪ねる
小動物、アリやダンゴムシ・ワラジムシ類
やクモ類、花粉を運ぶ動物の存在の観察記
録をしている研究者は誰もいないのです。
できれば1日中この花の前に座して、花が
いつ下を向き、上を向いたか、何が来て、
何が花粉を運んだか、開花と訪花動物との
関係を観察し記録し続けたいです。

さて、実際に、このオオウメガサソウ、
何で個体を増やしているかという、オ
オウメガサソウの白い根はクロマツの根
の先端部、細かい糸状のものと絡み合っ
ていて、マツとオオウメガサソウとが養
分や水分などをやりとりしたりしている
のです。そしてそれらの間にはバクテ
リア類が存在し、根と根のつなぎの役目
をしています。土壌、バクテリア、マツの
根、オオウメガサソウ、これらがすべて関
係しあつて共生関係にあるのです。まさ
に菌根植物と呼べる生き物なのです。ま
さから、先ほど、ダンゴムシなど花の上の動
物の話をしましたがそういう動物の大気
中での関わりが不十分でも、実は、株が増
えることは可能なのです。でも、着しく
伸びきった茎の先に花は咲くから注目す
べきは花なのです。

南限の地にあつて、現在温暖化の進行
が影響しているのか那珂台地の松林では
オオウメガサソウは大変少なくなつてし
まい、村では、原子力研究開発機構の松林
で生育状態、特に群落や花の記録を続け
ています。今、日本でこの花の継続記録
を残しているのは、村と国営ひたち海浜
公園だけでしょう。青森県下北半島には
大きな群落地があり本県の研究者が訪れ
調査している報告があるようです。一人

が一つ、一対で重要な生きものを調べるとよい、と言える生きものがこの村にはいくつもあります。



▲シヨウリヨウバッタモドキは少ない

これはバッタの仲間でシヨウリヨウバッタモドキです。シヨウリヨウ(精霊)というのは人の魂という意味です。

お盆のころ、路ばたに草の多い墓場に集まる虫の中でおとなしく、かっこいいのはこれです。

亀下のおばばは、このバッタを捕まえて、バッタの顔を見て「父ちゃんの顔」だって言いました。実際に神さまや仏さまの形には見えないのですが、目鼻立ち、形あるものに故人の生前の姿を重ねるといって、そういう、虫との「つきあい」がかつてはあったのです。

さて、昆虫を育てるには卵から成虫まで育て上げないとその昆虫の特徴は分かりません。



▲ツマグロヒヨウモンの蛹

これは蛹です。最後の脱皮をする時、ツマグロヒヨウモンの雄になります。



▲ツマグロヒヨウモンの雌蝶

ツマというのはいま、つま、端、はしのこととで前翅の両端が黒い蝶ということですね。この蝶は、今から30年前は東海村にはいませんでした。

地球温暖化の進行で、晩秋、卵からかえってスマレ類の葉を食べた元気な幼虫が

冬越しに成功するようになり、春先、餌があれば増えます。餌は在来のスマレ類や園芸種のピオラやパンジーなどのさまざまなスマレの仲間です。ツマグロヒヨウモンは南から北にやってきたタテハチヨウウ科の蝶です。いつかは、姿を消すでしょう。



▲アオムシと寄生バチの蛹

小学校の理科では中学年の児童がモンシロチョウの幼虫などを育てるという授業があります。

これはモンシロチョウの良く育った幼虫ですが、体の後半に何かが出ています。寄生バチの蛹の集合です。

キャベツ畑の開いた葉の上などにいるアオムシ、モンシロチョウの若い幼虫の腹の上にとまって寄生バチが卵を幼虫の体の中に産み付けます。数日経つと、卵がかえってアオムシの体の中で、アオムシの体の一部を食べ、宿主を生かさず殺さずでハチの幼虫は成長して、ほぼ同時にアオムシの皮膚を食い破って出て蛹になります。



▲珍稀なラクダムシ

なぜ、アオムシの後ろに蜂の幼虫が行くのかというと幼虫は葉をゆっくり食べ、食べたものが腹部の後半分にたまる。ハチにはお尻のほうがおいしいのです。蛹から蜂が出てきて、まわりにアオムシがいれば、また卵を産み付けます。しかし、「されるもの」がいなくなると「するもの」もいなくなるのです。野外ではこのように生死が転換するようなことを小学校でみせるのも有益です。「ふえたものはいつかはなにかの条件が変わると減っていく」、それを教えないで、昆虫の完全変態は卵・幼虫・蛹・成虫だよと形式的に一つの現象だけ示してアオムシが可哀そうだね、では駄目なのです。

一つの生命現象を初めから終わりまで観察したら、次代、その現象に変化を与える事象、例えば温度、光の明暗、食物の質や量などを工夫してこれまでの生きものの生活の様子を変える条件は何かや、生活史の初めから終わりまでをみせようとしてはどうでしょうか。探求心の芽を伸ばしたいのです。

村で採った昆虫で珍しいものはこの虫です。ハチではありません。

調査30年で1度だけです。豊岡の海に面するクロマツ林。マツの枝から滲みだす脂が好みのアブラムシを捕食するこの昆虫はラクダムシ科ラクダムシ属ラクダムシ、県では1科1属1種の珍虫です。

近年、松林の管理がよくなって農薬を使うのでアブラムシが消滅してしまふ。なぜ村に生き残っていたのかという食肉性の昆虫は餌が不足すると生息数が減ります。菜の花、秋はセイタカアワダチソウなどにアブラムシ類がぎっしりつきます。松林の周辺の耕地や原野の草本につくアブラムシを食べ出します。主食がなくなると次なるものを探し出したものだけが生き残り、一つのものにこだわったものが絶滅してしまうことがあるのです。しかし、ラクダムシはうまく食性が転換できないのか村ではもう会えないと決めつけてしまう自分は根性なしなのか。



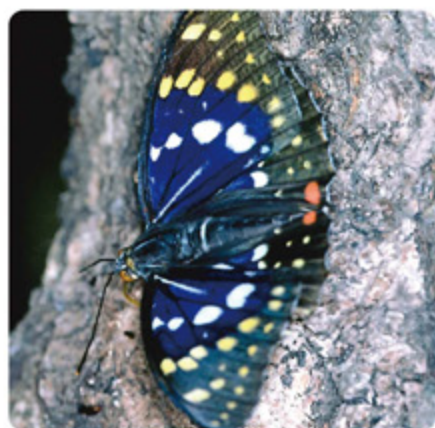
▲トノサマバッタの交尾

これは村のバッタの中で一番大型なトノサマバッタです。

雄が上、下が雌です。私の友人につくば市の産業技術総合研究所に勤めている研究者がいます。

私達は牛や豚、魚肉などを食べていて、昆虫は食べなくなっています。しかし中国や東南アジアではゲンゴロウ、タガメなど水生昆虫ばかりか、雑多な昆虫を食べています。地球上、もし食糧難で動物性蛋白質が枯渇したときに、それを相当量含んでいて、身近にいる動物はバッタ類で、胸と腹部を粉にすると、栄養価の高い食品になると言い、彼は今、バッタを捕まえて、加工して小麦の粉に混ぜて、栄養価の高い粉にする、という研究開発をしているようです。その仕事のひとつとして産業技術総合研究所のお兄さんたちと草原で200頭ほどバッタを捕まえて、肉質を粉末にしその粉を交えたビスケットを食べたことがあります。

バッタが好きなのはサツマイモの葉です。すから、どなたか食品化をやってみてはどうでしょうか。



▲国蝶オオムラサキの吸蜜

昭和30年代に日本昆虫学会は投票で日本の国の蝶を選ぶことになり、アゲハチョウなどとこの蝶で競争をしてわずかの差でオオムラサキが国蝶となりました。

大型の蝶で、口吻は太く橙色、コナラとかクヌギなど樹液を出す木の幹に止まってカプトムシやスズメバチを押し退けて樹液を吸い飛び回ります。



▲国蝶・甲虫、コナラの幹の蜜に集合

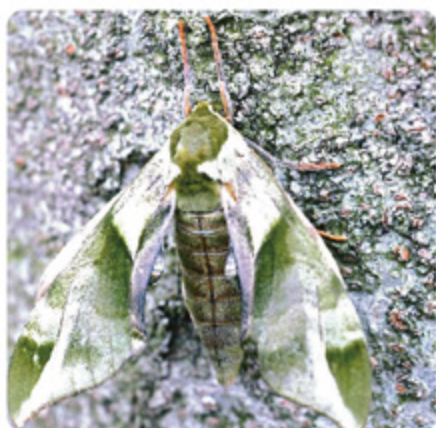
図は、雌に雄が接近しています。雌の脚下にはヨツボシケシキスイ。口もとにはカナブンがいても無視、吸蜜中。雄は忍耐。



▲待機、ガガンボモドキ

これ(上・左)は、世界中でも日本列島、本州(東北・関東・中部)のみ記録が残る固有種で、現在は関東地方にしかないのではと言われる昆虫ガガンボモドキです。食品の「雁擬き」ではありません。

飛びながら細長い後脚で雄はクモとか小さな飛ぶ虫をひっかけ、捕まえた虫を雌に与えて受け取れば交尾できるという習性は珍しい。低山地や里の雑木林、竹やぶの下草に成虫は止まっていて、あまり注目されたことのない一族。近年、村でも、林の下草などが草刈り機で全てが刈り取られ明るくなり、成虫を見る機会が減りました。今では非常に限られた場所からしか見つかりません。分類上は、長翅目ガガンボモドキ科、ガガンボモドキ属、ガガンボモドキ(ヤマトガガンボモドキ・ヒメガガンボモドキ・ニッポンナガシリアゲ)。ガガンボ、見たことがありますか。



▲羽化間もないウンモンズズメ

この綺麗な虫は何かという問いに対して答えが蝶や蛾だけでは面白くないです。スズメガ科、ウンモンズズメで生時の緑色の前翅の斑紋は、標本にすると退色し古い標本は汚黄色となってしまふ。昆虫の

色彩的な美しさは成熟時に最高点に達するようです。

中国は蛾のほうが人気ものなのです。最近、女性の蛾愛好者が増しているとか、静かに蛾ブームが広がってきています。

3 水の中に宝物



▲トウキョウサンショウウオ成体

トウキョウサンショウウオは村の水源地、湧水地一帯の環境保全の指標となる両生類ですが、村全体として生息数が減少しています。

体の大きさは陸上でみられるカナヘビやトカゲよりは少し小さいです。春先、水田や雑木林の縁を流れる細い流れに卵を産みます。村内の産卵場所の分布は特徴的で、久慈川に流れ込む水路の源流域にはいなくて、新川、真崎浦の方に流れる

いくつかの小川や水路にいることが分かりました。全体として15か所、産卵する場所が分かったのです。

春から夏まで水中のカエルの幼体や昆虫などを食べて育った幼体は晩夏、陸上生活に入るのですが、トウキョウサンショウウオの成体が陸に上がるとこのような感じですよ。



▲トウキョウサンショウウオ 歩く

昼間はじっとして、夜だけ動きます。夜行性の動物です。

水の中でじっとしているときの幼体は見つけられても大きくなって陸に上がる成体はどこに行っただか見つけられません。

私は1回だけ、中丸地区の林縁でモグラが掘った穴で越冬中の成体を見つけたことがあります。

4 家守・蛇・小型けものたち



▲ニホンヤモリがいた

これはニホンヤモリです。爬虫類です。

ヤモリは家を守ると書いて、本当に守るのかわかりませんが、夜になると灯に誘われて室内にまぎれ込んでくる小さな虫たちを食べてくれます。南方系の動物です。戦前は鹿行地方の潮来が北限でそれより北にはいないだろうと言われていました。ここ20年ほど前から、水戸市内ばかりか、日立市南部にまで姿を見せています。地球温暖化で冬越しできるようになったのです。村でも駅西で4尾見つけました。



▲目がかわいいアオダイショウの幼体

ヘビの仲間でも、アオダイショウは人一番付き合いが上手だったヘビです。

農家にとって大切な納屋の穀物を狙うネズミ類をヘビは好んで食べる。人家のどこかに潜んでいて、食べ物をまもってくれる一番大きくて強いからアオダイショウと言いました。人家に造られた巢にいる哺乳類のネズミ類や小鳥の雛を食べます。木登りが得意で、スズメやツバメの雛を食べ、野鳥を大切にしている人たちには天敵ですが、動物の生息状態のバランスを取る意味でヘビ類が生息するという地はその土地一帯の生態系はほぼ安定しているとも言えます。その安定性

を崩してしまったとすれば、まず、私たちヒトの行為を反省すべきでしょう。それにしても可愛い目をしていきます。

亀下のおっぱは、アオダイショウの表皮を干して、しまいこんでいたり、脱皮した皮を15cmくらいに切ったものやカマキリの体前半分、カマと頭部を干しておいて、誰かが腹を下したときに煎じて飲ませていました。「カマキリカマキリ腹の虫食っちゃえ」と言う。そうすると次の日にはなおってしまう。一つの生きものが死んだから埋めるというものではなくて、このものの生きた証、名残を何に使えばどう役に立つのかを示唆してくれたのですが、蛇きらいでした。



▲舌を出した美蛇ヒバカリ

押辺の道端で出会った細いヘビ、ヒバカリは、噛まれると、その日ばかりで死ぬという伝説の持ち主。これ実際は無毒です。



▲久慈川河川敷のカヤネズミ

ネズミ科カヤネズミです。林地と水田耕作地に接する草原のススキとかチガヤとかの葉を、丸めて巣を作り仔を育てます。日本で最小のネズミ。石神の久慈川河川敷は海に近い生息地で記録的です。このネズミがいるところは生態系が安定していると言われていますが、調査は困難で、実状はよく分かりません。



▲アカネズミは減ったか

アカネズミです。市街地にいるドブネズミ、畑など耕作地に住むアカネズミの実態調査も不十分です。このアカネズミは、林床や耕作地の土の中にいてミズやケラばかりか植物の種子なども食べます。夜行性の動物で、村でも目視例は多くないです。



▲泳いでいたアズマモグラ

アズマモグラです。頭胴の長さは145mm、尾は14mm。白方地区の水田に浮んでいました。日本固有種。地中の昆虫やミミズ類が主食。寿命は3年ほど。モグラが泳ぐことは珍しいです。



▲不審死のイノシシ

イノシシです。船場の坂道、どこからこの地点までやってきたのだろう。イノシシが何か毒を食べて死んでいました。これは孕んでいるイノシシですね。

1時間後に関係者が現場から持ち去りました。村内での大型動物の移動など、外来種のハクビシン、アライグマの行動も予測不能です。環境保全には地元住民の知恵と行動力が不可欠でしょう。

今、茨城県は関東地方で一番イノシシが跋扈しています。ノウサギ、リス、ネズミ類は減少、ノネコ、野犬増加か。

5 花咲く里山が生きもののふるさと

さて、東海村の今の自然環境をまとめるとともに未来へ向けたお話をしたいと思います。

村は日本列島本州のほぼ中間の地点にあり、南の動植物と北の動植物、高いところの動植物と低いところの動植物とが混ざり合っています。その中で最近北系系のものが南方系のものに押されているという印象があります。南のものがやってきてこの地は住みよいといばりすぎているかなと感じます。海に生きるものも、似たような気がしています。

それから、海岸海浜の動植物が豊かに成育・生息していても良いと思います。調査がまだ不足している面もあります。

日本原子力開発機構では昭和30年代から構内や海岸の生物の記録などをとっています。その中では、アカウミガメやスナメリというクジラの仲間など、エイの仲間やいくつかの大きな動物が海岸にうちあげられたり、渡り鳥の大群が舞ったりと、村の海岸は豊かな生き物の生活の場所だったことも分かります。それが今ほとんど変わってきて、海岸地形が変遷し、砂浜の「痩せ細り」が進行しています。

海岸の緑、シロヨモギ、ハマボウフウ、スカシユリ、ウンラン、ハマゴウなどが生育する海岸、緑をふやして、四季、白砂青松の海岸の景観を大事にしたいです。

本年は、東海村の植物全体を見直し、村の代表的な木はヤマザクラ、権現山のヤマザクラは村の天然記念物の雄です。そうした台地上のヤマザクラの巨木・老木全部の状態を点検し、村内のヤマザクラ花見の回廊を作りたいですね。野鳥やいくつもの蝶にも会える遊道を作る、ということ

初夏にはホタルの飛ぶ水辺がまだまだたくさんありますから、見たり育てたり増やしたりという意味で湧水地の周辺の緑地を確保して夏の夜の楽しみをつくり上げるのもよいと思います。

村のクロマツ・スカシユリ・サツマイモの「みどり」の未来の姿を求め、描く集まりをここ交流館で開こうではありませんか。

川の話から虫の話になり、とうとうへびやモグラから花となりヤマザクラで終わりになりました。虫は花が大好きです。ご清聴ありがとうございました。おわかります。



▲講演会での一コマ



▲東海村文化特別功労賞を受賞した廣瀬誠



より学びたい方のために 廣瀬誠先生のおすすめの本

茨城県東海村の自然・動物をより深く知るための文献を廣瀬誠先生が紹介！
雑誌の著者名等・発行年・書名等・発行所等、先生からのコメントの順で紹介
しますので、もっと知りたい方はぜひ手にしてみてください。

矢島 稔 1976

昆虫の生きる世界―昆虫入門
文化出版局

ラジオの「全国子供電話相談室」解答者で著名な昆虫研究者が、昆虫の体の構造、感覚器官の多様性、人間との関わり、を説き、学校の理科教育はいまのままでよいのかを問う書。時代的には古くなったが、ナチュラリストの主張をかみしめてみよう。

廣瀬 誠 1984

ふるさとの野帳 東海村

東海村長の須藤富雄氏に誘われ、村の自然、人々がどうの昔に忘れ去ってしまったような、野の草、小さな生き物、そして雑木林、これらの話を書き続けて6年5か月の連載記録。

カマキリの事故死は、NHK FMで朗読され、十三参りの章では通称ジジババ、和名シユンランを探し、村の春は確実に海からやってくる、と書いた。

東海村史編さん委員会 1991

村の歴史と群像 東海村

写真ページ全てが村の人々、自然環境の貴重な記録であり、自然史の資料となる。
巻頭、「東海村の運命を決定した日」

正力松太郎國務相の記者会見風景」に

続く、「那珂台地48ヶ村を湧かせた荘大な祭り―神幸馬神興渡御行列―」、カラー見聞きの「東海村の国家的行事3代プロジェクト―砂防林・青嵐荘・原子力施設群」の偉容、「村の新しい顔―文教地区と変貌する駅西東地区」の景は20世紀末の水辺とともに生きた村を表現。通史概説は志田諱一氏の名文。

各集落の航空写真は、豊かな緑野・整った集落の配置・久慈川の曲折などを精密に写す。

東海村の自然調査会 1994

東海村の自然 東海村教育委員会

自然誌シリーズの第1号、村の地形と地質・植物・動物・人との関わり・動植物目録などから成り、総ページ337。

貴重な化石の産出、珍しいウニの化石の写真、ベッカムニシキの化石写真解説で、深い海底で堆積などの文で興味がわく。植物の大事にした種々の生態写真は、東海ネーチャーホトクラブの村上廣美氏の撮影で、オオウメガサソウの花と実が写る。昆虫、ハッチョウトンボの記録は、7月の1旬だけ。螢類は、根本邦宏氏の労作、ヘイケボタルの分布図は力作。植物は安嶋隆氏力作の目録。

串田孫一 1994

虫と花の寓話 東京新聞出版社

著書「博物誌」などで著名な作家が自然人の目で、個性的に、虫の行動や花の変化などを見ているうちに想い浮かんだことを50話書き綴り一書にした。章題、嫌われる宿命―炉辺の亀虫、奇怪な事件―アオオサムシの死、琥珀の中の眠り―ガガンボの死、三角の日なた―冬の蝶、変身への憧れ―風の中の紋白蝶、など虫の行動を追っています。

東海村教育委員会 1995

ふるさとの自然 東海村教育委員会

1991年4月から1995年3月まで「広報とうかい」に掲載した自然に関する記事と写真をまとめた小冊子。少しずつ変わりゆく村の素晴らしい原風景を思い出す手掛かりにしよう、と意図した。

民俗学者藤田悦氏のヘビ・ウメ・サクラ・ウナギ・ドクダミ・マンケシ・屋敷林のページは貴重な読み物。動物・植物・環境の章に村の自然の豊かさが表現されている。

遼源東海 第6号 2000

東海村教育委員会

「遼源東海」は東海村史編さん関係の研修誌として、昭和62年(1987)年3月以来、年1回第5号(1991年3月)まで刊行して休刊。

村の総合研究誌として再生、郷土再発掘の縁を目指したが、第6号で休刊。

自然関係では、鈴木昌友「東海村で記録しておきたい植物―オオウメガサソ

ウー」と廣瀬誠「石神のヒメシロチョウ考」を読む。

日本原子力研究所東海研究所 2001

東海研究所南地区における動植物生態等調査報告書

日本原子力研究所東海研究所

敷地内南区において計画されている「大強度陽子加速器計画」に関する動植物生態系等調査について、平成11年8月から12年8月にかけてコンサルタントに委託した1年間の調査結果ならびに専門家(植物・鈴木昌友、動物・廣瀬誠、野鳥類・山口萬寿美)の意見聴取などの全てをまとめている。

植物進化の典型的な代表種オオウメガサソウ、海浜植物で減少傾向を示すハマカキランや動物ではワシタカ類オオタカ営業環境調査などに重点が置かれ、情報を収集した。

昆虫類は、ヤマトスナハキバチ、アサギマダラ、ハスモンヨトウなどの記録がある。

井上久夫他 2007

茨城県茂宮川河口干潟および沖合の海産無脊椎動物 茨城県自然博物館

第4次総合調査報告書

茨城県自然博物館

県の沖合の底生無脊椎動物については、従来まとまった報告がなく、今回は、貴重な情報が得られた。

東海村の沖合ばかりか、久慈川と茂宮川の流路の改変で干潟の面積や位置も変わっているが、久慈川河口周辺の干潟に出現する固有の動物相の報告は注目。

海野和男 2005

虫から環境を考える②

雑木林を飛ぶオオムラサキ 信成社

日本一大きくて立派なタテハチョウ科オオムラサキの生活史の全てを、日本一の昆虫生態写真家が撮影した写真と解説。この本以上に詳しく、しかもとても蝶の生命を尊重してまとめ上げた虫の本、見たことはない。

東海村の中丸地区の雑木林で、梅雨明けの晴れた朝、東海村の文化財と自然を守る会の会長須田秋夫さんに案内され、樹液したたるコナラの幹で樹液を吸う蝶の気高さに、言葉もなく見惚れた至福の時を忘れない。そうだ、この森一帯の環境を、より豊かにしよう、と、「自然は守る・環境は創れる」と二人とも信じて。その後、須田氏、村を離れ、寂しい。

東海村の自然調査会 2007

東海村の自然誌 東海村教育委員会

村の自然誌としての第2号、菊池芳文氏のオオヒタチオビガイとスケガワギンエビスの化石写真が巻頭を飾る。村上廣美氏はオオウメガサソウ、キノコ専門家の糟谷大河氏は、村松の海岸砂浜に見られるコナガエノアカカゴタケ、須田秋夫氏はトウキョウサンショウウオ2尾の秀作写真で、村の自然の美の極致を再現してくれました。

前著の形式は保っているが、菌類の調査の成果発表は県内の地方自然誌にはない高精度の内容と評価されています。

東海村教育委員会 2009

ふるさと歴史 東海村教育委員会

村の広報誌「広報とうかい」紙上連載の自然や歴史に関する「ふるさと歴史」は平成10年度から19年度までの120編、村史編さんの過程で平成2年度から掲載の「村史悠遊」20編を併せて一冊に統合した貴重な資料。

廣瀬は、トンボ目ムカシヤンマを始め、アオマツムシ、トウキョウサンショウウオ、ニホンヤモリ、ケラ、セミヤドリガ、クロコノマチョウ、ヒカリモ、ヨコツナサシガメ、オツネントンボ、ハッチョウトンボ、スズメバチなどを解説、生態写真を載せた。

財団法人 国際科学振興財団 2010

東海村みどりの実施計画基礎調査業務委託調査報告書

財団法人国際科学振興財団

筑波大学教授鈴木雅和博士の指導により、東海村みどりの実施計画の基礎調査編が刊行され、村のみどりの基本計画が実施計画化した。

計画における「みどり」については、自然性の高い緑地・植栽地に分類され、みどりと関連する歴史・文化・観光資源の再検討指針も設定。農業景観や農業資源の現状把握にも様々な情報収集の成果を挙げている。特色は地理情報システム(GIS)の活用であり、資料的価値は高い。

東海村建設水道部都市政策課 2011

東海村みどりの実施計画(緑地保全の手引き) 東海村

整備プランで提案された、みどりの将来都市構造における自然との共生の章、動植物が永続的に生育・育成できる生

態系を創出するために、生物多様性の保全に配慮したみどりの保全・活用を目指し、久慈川沿いの斜面地や久慈川や新川、用水路から構成される水系とその周辺の環境保全を望んでいる。

東海村の文化財と自然を守る会 2013

東海村の生き物を守る会「生き物が住みやすい環境づくり」プロジェクト
茨城NPOセンター・コモンズ
村の生き物愛好者が調べた「むらのなかまたち」トウキョウサンショウウオ・オオムラサキの生活環境などが地図・生態写真で示され、村の希少な動植物のページの「果の上のオオタカ」は、その後、巣を捨ててしまった。ミヤコタナゴは発見できません。どこかにいるか。

日本チョウ類保全協会編 2012

フィールドガイド 日本のチョウ

誠文堂新光社

日本に生息する全てのチョウなど264種類を掲載し、種ごとに♂・♀、表翅・裏翅の写真を用い、近似種は検索表などで比較しやすいように並べてあり、現在、北関東の茨城県内に生息のチョウの種類分けや生活史の概要は明瞭になる。

東海村 2014

東海村生物多様性地域戦略「自然の恵みが持続するまちづくりに向けて」

東海村

村のランドデザインである「東海村生物多様性地域戦略」は、いまや、推進体制を整えて進行し、短期的な展望で

あっても具体的な制度化を実現させた。30ページ余に達する資料編を現地調査などで評価してはいかたろう。

村の青少年参加の河川敷や海浜の自然観察会を実現させ、秋、林内でキノコ探し、冬、久慈川河口の鳥たち、なども対象として。

茨城新聞社 1917

いばらきセクション125 みんなで選んだ茨城の宝 茨城新聞社

東海村は「干し芋」で選んでいる。干し芋には食物繊維やビタミンB1、ビタミンC、カリウムなどの成分。何もかも使わない無添加食品で、身体にいい保存食。
サツマイモの葉を食べたり、根をかじったり、花の蜜に集まる小動物を知っていますか。イモ畑、何が住むか。

平島義宏・広渡俊哉編著 1917

教養のための昆虫学

東海大学出版部

標題通り、昆虫学の準テキスト的な位置づけで、昆虫の形態や生態の興味深さを優れた線画や珍しい写真、イラストで説明し、1ページから50ページまで読みきったなら昆虫学入門の資格者となる。第14章昆虫の分類のコラム1〜3は必読の内容、生態写真はベニトトンボ、ヒナカマキリ、ブナ帯に生息のキスジラクダムシ。東海村のガンボモドキに酷似のガンボモドキの一種に魅せられてしまった。成人向きの好著。

東海村の自然調査会 2018

東海村の自然誌Ⅱ 東海村教育委員会

村の自然調査会の第3期、2014年から2018年までの調査研究の結果報告。並行して、「東海村の自然誌マップ」も作成、村内の小中学校などに配布。郷土理解、郷土愛醸成の三部作の締め。

村内を流れた水中火砕流、外来植物目録と生育状況の写真、菌類レッドリスト、魚類、昆虫類、海浜に生息の節足動物ヒトハリザトウムシやイソコモリグモ、カニ類は注目すべき内容だ。

国府田克彦氏担当の「人と自然とのかわり」解説、「東海村の墓石に見る石材と産地」は、町屋墓石の歴史の活用の際合的な調査と解明で異色の力作。

東海村教育委員会 2019

ふるさと歴史 第2集 伊蔵・自然調査最前線II 東海村教育委員会

村の広報紙の2008年4月から2017年度末までの「ふるさと歴史」と2015年7月から2017年度末までの「自然調査最前線」の二つのシリーズを一括してまとめた読み物。前回同様、往時の村の生活の様子や伝統行事、地震や津波、強風の追跡、動植物の存在、さらには祖先の墓石の物語と多彩。

廣瀬は、春蟬、カニ、シンジュサンとドクウツギ、蝶、ヘビ、カヤネズミ、ハンミョウ、トンボ、どうしようかと不安でしたが、ゴキブリだって愛されたいと題した小文が最も反響を呼んだ。今でも編集者に感謝。ゴキブリ、かわいい。

廣瀬 誠 2019

那珂郡東海村の蟲備忘

茨城生物第39号 茨城生物の会

茨城生物の会の会誌「茨城生物」に表記の小文を発表、村の自然調査会が平成時代の30年間に3冊の自然史関係の大事を発行した始末の見事さを称賛した。動物部門において、多種多様な無脊椎動物の一群、昆虫類を主として調査・記録したが、報告書に洩れた記録が多い。追加として短報13篇を載せた。

蝶よ、蟬よ、蜻蛉よ、と書き進めたが、村では新発見の陸生ブラナリアの巨大種、体長が400mmになるオオミスジコウガイビルの村松や白方の生息記録を書き残したことを悔いている。

國府田 克彦 2021

墓石と石材が語る社会 東海村及び日立周辺の墓石を調べてー私刊

村の自然調査会の地史・古生物部門調査副主任菊池芳文(千葉科学大学・理学博士)は本誌を評して、この書が、学術的な研究方法を基にまとめられたことは明白で、地質学と民俗学を融合させ、新たな分野を切り開いた他に類を見ない書であり、真の郷土研究者が記した後世に残すに相応しい著作と言える絶賛。

多くの村民に手に取って読み込んでもらいたい「石材と人との言葉にならない関わり」が行間に秘められていて興味深い。

令和3年7月から8月にかけて、夏休みの自由研究のため歴史と未来の交流館が調査及びレファレンスに協力した黒澤美樹さん(当時中学1年)の調査成果をまとめた作品が、令和3年度いばらき児童生徒地図作品展で優秀賞を受賞しました!

今回、東海村のマツの分布に興味を持ったという黒澤さんに、調査の成果とそこから見えてくる課題についてレポートしてもらいました。

作品名：クロマツとアカマツの分布マップ

学年氏名：中学2年 黒澤 美樹

【動機】

「昔、東海村にはアカマツ林があって季節になると松茸採りに行く人がたくさんいたんだよ」と祖母から聞きました。よく利用する国道245号線沿いに生えているマツを見ていると、幹の色が赤みを帯びているアカマツと黒白色をしたクロマツがあり、それぞれどんな場所に生えているのか疑問を持ちました。

【目的】

東海村のアカマツとクロマツの自然分布を地形図および航空写真をもとに調査することで、アカマツとクロマツの住みわけがあるのか調べることにしました。

【調査方法】

文献調査と地形図で針葉樹林を示している場所に出向いてマツの分布を調査し、マツの樹皮の色や葉の性状を基準に、外観的にアカマツとクロマツを判別しました。

【結果】

1. 海岸線長さ約3km、幅約0.6kmの範囲で断続的に松林が広がっていました。
2. 海岸線以外でのマツの群生は確認できず、針葉林を示す地域での木種のはほとんどがスギ・ヒノキで、村南西部の一部の雑木林にマツの混生が認められました。
3. 海岸線に近い砂地ほどクロマツの生育が多く、海岸線から0.3kmほど離れるとアカマツの生育が優勢で、内陸部の林でクロマツを見つけることは困難でした。
4. 海岸沿いの立ち入りができないクロマツ林ではマツ枯れが酷く殺風景になっていましたが、村ではクロマツ林の砂防林としての機能と景観を維持するために「クロマツ林リジェネプロジェクト」を行っていて、クロマツの苗木が植樹されていました。
5. 東海村の多くの住宅地の庭でマツの生育が見られ、特にクロマツが育てられていました。

【考察】

1. クロマツとアカマツに住みわけがみられ、クロマツは他の樹種との競争力に弱いですが砂地や潮風といった厳しい自然環境に強い性質を持っていると考えられました。
2. 森林環境の保護が地球温暖化対策や国土保全のために叫ばれていますが、東海村では宅地化が進み、本来あったマツ林が消失しています。そのため残されたマツ林を保護していくことが大切であることをみんなに知ってもらいたいと思いました。

【参考文献】

- ・いばらきデジタルマップ 森林計画図
- ・東海村森林簿(東海村農業政策課提供)

【謝辞】

この作品は令和3年度いばらき児童生徒地図作品展で優秀賞、全国作品展中学生の部では11作品の中にノミネートされ、光栄に思います。いばらき児童生徒地図研究会の茨城大学村山朝子教授に深謝します。また、作品を制作するにあたり、東海村歴史と未来の交流館の野田美智子学芸員および安嶋隆博物館長には貴重な資料のご提供とご助言をいただきました。



黒澤 美樹さん

黒澤さん、この度はおめでとうございます!歴史と未来の交流館では、自由研究や調べ学習の相談を随時受け付けています。交流館の専門家がおひとりおひとりの要望に応じて資料提供・共同調査・外部機関紹介など対応いたします。ぜひご利用ください!

速報

東海村について

自由研究をした中学生、

快挙!

アカマツとクロマツの分布マップ^o

in TOKAI, IBARAKI



アカマツ

【動機】「昔、東海村にはアカマツ林があって季節になると松茸取りに行く人がたくさんいたんだよ」と祖母から聞いた。よく利用する国道245号線沿いのマツを見てみたが、幹の色が赤みを帯びているアカマツと黒白色をしたクロマツがあり、それぞれどんな場所に生えているのか疑問を持った。

【目的】東海村のアカマツとクロマツの自然分布を調査することで、アカマツとクロマツの生え分けがあるのか調べることとした。

【調査方法】文献調査と地形図で針葉樹林を示している場所に出向き、マツの存在を調査し、マツの樹皮の色、葉の性状を基準に系統的にアカマツとクロマツを判別した。



クロマツ



クロマツ製林 地点A



マツ林の土壌



マツの立ち枯れ 地点E



クロマツ林の再生プロジェクト 地点F

【調査結果】

1. 海岸線から約3km、幅約600mの範囲でマツ林が広がっていたが、沿岸部以外でのまとまったマツ林は確認できなかった。
2. 内陸部の針葉樹林を示す場所での木の種類はほとんどはスギ・ヒノキであり、マツは一部の雑木林に混じって生えていた。
3. アカマツは内陸部の雑木林中、クロマツは沿岸域に多く見られ、特に海岸線から約200mの間にクロマツ林があった。海岸線から約200~600mの間はクロマツよりアカマツが多く生えていた。
4. クロマツが多く生えていた土壌は砂質で、アカマツが多く生えていた土壌は有機物が多い砂質だった。
5. 一般の人が立ち入ることができない場所のクロマツ林ではマツ枯れが顕著な状態になっていた。
6. 村ではクロマツを保護するために「クロマツリジリエンスプロジェクト」を行っており、クロマツの苗木を植林していた。
7. 多くの住宅地の裏でマツが植えられ、特にクロマツが多かった。

【考察】

1. クロマツとアカマツに生え分けが見られ、クロマツはアカマツとの競争力に劣り、砂地や岩地といったとても厳しい自然環境に強い性質を持っていると考えられる。
2. 森林環境の保護が地球温暖化対策や国土保全のために叫ばれているが、住宅地化が進み、本来ならあったマツ林などが破壊されている。そのため残されたマツ林などを保全していくことが大切と考えられる。

【参考文献】

いばらきデジタルマップ 森林計画図
・東海村農業政策課 提供資料(未来と歴史の交流館)

村内で活躍する「まる博研究員」からの報告です。

歴史と未来の交流館研究員（通称…まる博研究員）とは？
 約1年間の養成講座を修了し、歴史と未来の交流館を拠点に地域の歴史や自然に関心を持ち調査・研究等様々な活躍している方々です。
 現在23名の方々がまる博研究員として活動しています。

レポート 1

感動！野鳥観察

〈未来に伝えたい身近な自然〉

鈴木 さちよ

中丸小学校周辺で、まる博研究員が野鳥観察を行った。初心者でも野鳥を発見しやすい真冬の1月20日、野鳥専門家の益子美由希先生指導の元、双眼鏡と図鑑片手に散策。一時間程度で15種超の野鳥と出会った。感動の声を上げ観察を楽しんだ。

東海村は歴史や自然を研究し次世代への継承を目的とし「歴史と未来の交流館研究員」(通称…まる博研究員)養成講座

を実施している。この日の現地研修では、ヒヨドリ、アオジ、メジロ、ハクセキレイ、モズ、ウグイス、ツグミ、ハシブトガラス、コジュケイ、コゲラ、シジュウカラ、ヤマガラ、オオタカ、ジョウビタキなどを声や音も頼りにして双眼鏡を向けると野鳥の姿を鮮明に確認できた。以後は野鳥が目につくようになり、身近な自然環境保全への意識が高まった。

レポート 3

みてみませんか 身近な野鳥を！

竹村 美智子

東海村には自然がいっぱいで四季を通して野鳥の観察が出来、庭に来るヒヨドリ・すずめなどは身近な生き物です。姿も美しい鳥達をみることは忙しい日常から解放され、心身をリフレッシュする貴重な時間になりお勧めです。

そこで鳥の特徴、習性について、「ヒヨドリ」はぼさぼさ頭のわんぱくたち。全国的に一年中、庭先でもよく見られ、最もポピュラーな野鳥、平地や山林の林に棲む。スズメより大きく尾が長い。「ビヨ、ビヨ」とかん高い声で鳴く。ノブドウ、ナンテン、アケビの実を食べるが甘いもの好き。波形に飛ぶ。「すずめ」は人里で暮らす茶色の隣人。人家のある所、一年中どこにでもみられる。平地や山地の人家のある農耕地に多く秋冬には大群で生活し林や竹やぶをねぐらにする。食物はイネ、アワ、オオバコなどの種子が主食、夏には蚊の幼虫や昆虫を食べるなどがあります。

レポート 2

身近な楽しみ 鳥の観察

関 由嘉里

現在東海村は開発整備が進んでいるが、まだまだ自然の豊かさを感じられる街である。

そんな街での身近な楽しみとして、散歩をしながら手軽に始められるバードウォッチングはいかがだろうか。

特に冬は畑の作物が少なく、木は落葉する寂しい季節だが、だからこそ鳥が見つけやすくどこでも楽しむことができる。色・大きさ、鳴き声・飛び方等に注目しよう。この冬の平日、中丸小学校周辺の畑や林

で確認観察できた鳥たちは、二時間ほどで十九種であった。例えば、村の鳥でもあるメジロ。目の周りが白く見た目が名に。「目白押し」の語源にもなっている。メジロに似ているウグイス。春のさえずり「ホーホケキョ」は有名だが、冬は「チャッチャツ」と地鳴きをするのはご存知だろうか。よく耳にする「ビヨビヨ」はヒヨドリだったのか。上昇気流を利用して輪を描くように飛ぶトビ等だ。見つけた鳥を決めて出かけてみては。



レポート
4

白い花咲くうわみず桜 秋の野草観察会に参加して

立川 義雄

春の身近な山林に、白いブラシのような珍しい花が咲いている。「うわみず桜」である。この桜の樹木に興味をもったきっかけは、講座の一つにあった石神城址公園でのフィールドワークである。安嶋先生の案内と説明のもと、周辺の探検・観察を行った。公園内には、日頃聞き慣れない「うわみず桜」が自生していた。やがて、ブラシのような白い花が咲くとのこと。春になるのが待ち遠しかった。

四月にソメイヨシノが開花した頃、公園にたびたび行き観察をしたが、花を見ることはできなかった。そんな折、散歩の途中で近くの山林に白い花が咲いている樹木を見つけた。本で確認すると、まさしく「うわみず桜」であった。直径六〜八ミリほどの小さな花が穂状に集まって咲き、ブラシのようである。身近な自然の中で、ソメイヨシノの華やかさとはまた違う珍しい桜の花に出会うことができた。今年の春、開花するのが楽しみである。

レポート
5

「名前は大事！」

田所 則夫

東海村には、里山や水辺、田や畑など様々で豊かな自然環境があります。そこには、それらを好む植物や野鳥たちがたくさん生息しています。それらの自然を更に楽しむためには、そこで見かけた花や鳥の名前を特定し、覚えてあげることがポイントとなります。

図鑑で調べたり、人に聞いたりして、

ちょっと気になったものの名前を調べてみます。どうしても分からないときは、歴史と未来の交流館の先生方に相談することもできます。

そうして名前が特定できると、もうただの雑草や鳥というその他大勢ではなくなります。名前を覚えることで、親しみがわき、「今頃あの花や鳥はどうしているか」と気になるようになります。

また名前と実物の意外な違いも興味深いものです。例えば「ハキダメギク」という残念な名前の植物ですが、本物は意外に可憐な姿です。見たくなりませんか。

名前を知ることによって散歩の楽しみが更に増えてくると思っています。



レポート
6

石神城址の魅力を探る

岩間 清美

石神城は中世（西暦1400年頃）に築かれた石神小野崎氏の城です。西暦1500年頃に石神小野崎氏は同族の頼田小野崎氏と境争いで石神合戦となり敗北しましたが、その後和睦しました。西暦1547年、再度頼田小野崎氏と争いになり、城は落城しましたがその後佐竹氏への戦功により領地の維持と帰城が認められました。佐竹氏の秋田移封に従ってこの地を去り、石神城は廃城になりました。石神城は、標高19m比高15mの台地に立地し

て東側は旧久慈川が台地に向けて大きく蛇行しています。城跡は保存状態が良好で堀や土塁など当時の様子が良く残っています。中心の構造は、I郭、II郭、III郭の3つの曲輪からなっています。城跡は東海村石神内宿にあり、平成29年12月に茨城県指定文化財に指定されました。公園として整備されており駐車場も完備しています。春は城跡に咲く桜がともきれいです。みなさんもぜひ足を運んでみたらいかがでしょうか。

レポート
7

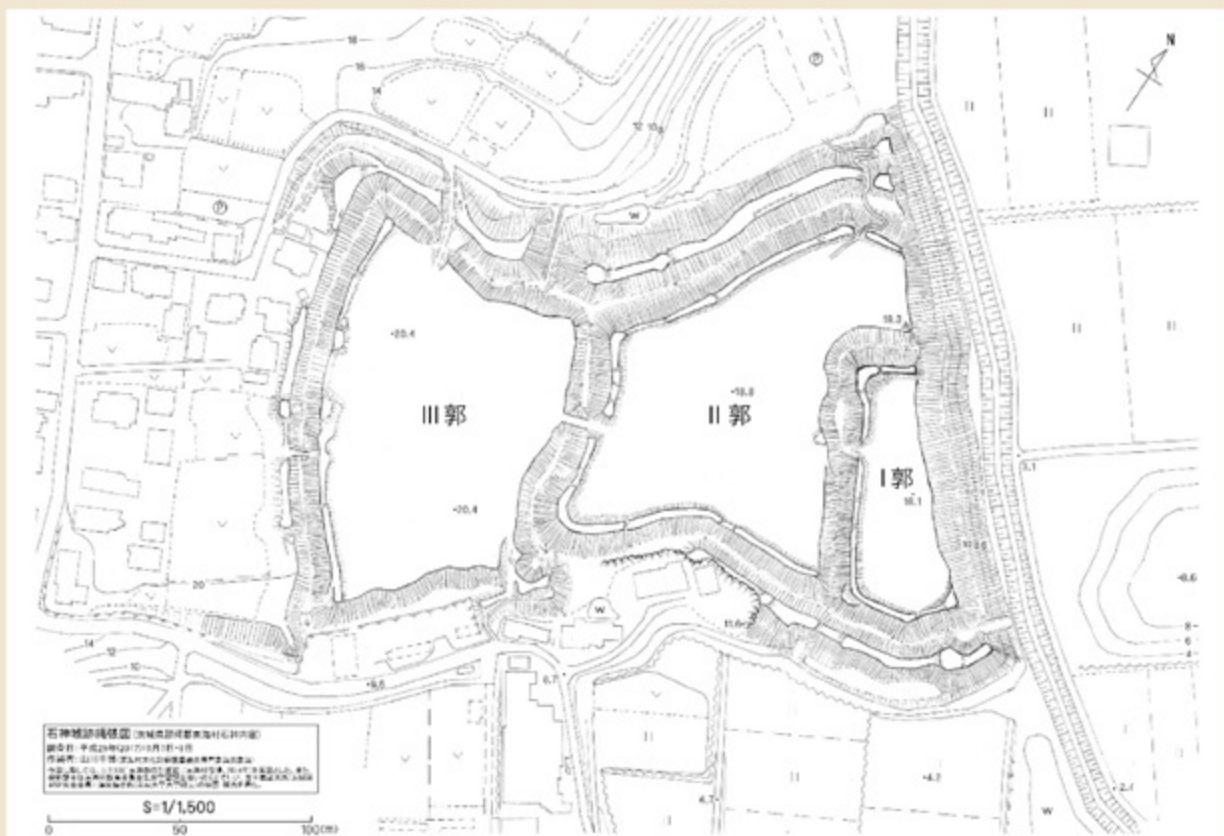
石神城址

奥寺 伊都美

城というと、天守閣や石垣などを想像してしまいが、そんなものは何もない。石神城は1602年の佐竹氏の秋田転封に従い廃城したようで、今は杉や榎、竹などの樹々の中に草が生い茂った平らな広い空き地となっている。駐車場は2カ所所有り40台駐車できる。北側駐車場にはトイレもある。めったに訪れる人もいないし、膝丈ほどの雑草が生えていて踏み込むのをためらってしまうこともあるが、美しい自然が残っている。4月上旬には数本の大きな桜に薄桃色の花が見事に咲くし、5月にはギンランの群生が見られる。6月には駐車場の脇に花しょうぶが咲くし、夏にはウバユリも咲く。

城は標高18mの台地に築かれていて、現在北側（日立市側）は水田が広がって

いるが、当時は蛇行した久慈川が城の下を流れていたそう。広い空き地は3つの曲輪からなっている。「遠見城」と呼ばれるI郭、「御城」と呼ばれるII郭、そしてIII郭。II郭とIII郭は一边が100mぐらいの四角形の広さが有る。曲輪跡の縁は土を1mぐらい盛り上げた土塁が築かれていて、7〜8mの深さの空堀で囲まれている。土塁や堀は敵の侵入や攻撃を防ぐものだ。確かに北側駐車場から堀や土塁を上り下りしてII郭に着く頃には城の警備に矢で射られてしまっそうだ。2017年には県指定文化財になるほどの状態の良い中世城郭遺跡なので、当時の景観を想像しながら散策して欲しい。



石神城跡縄張り図

レポート
8

石神城内池ノ上遺跡発掘

沢山 洋二

石神城外堀（石神コミセン駐車場）での池ノ上遺跡発掘調査から縄文時代から近世までの住居跡が発掘されました。

竪穴住居跡十二軒、鍛冶工房跡一軒、掘立柱建物跡八棟は、奈良・平安時代とみられている。中には

竪穴状遺構七軒、掘立柱建物跡は五棟、土坑三基、井戸跡も近世のもの一基と時代不明の井戸が一基発見されました。また遺物としては、土師器、須恵器、灰釉陶器、古銭、鉄製品、土製品が発掘された。

この地区は、古来より入江が、役場辺りまであり、池ノ上、滝ノ上、廣の浦、町池などの小字が残っています。この水辺は食料が多く縄文時代より人々が住み、徐々に集落を造っていった。人口増加と

ともに食料が必要になり稲作農業に発展し、農地拡大、守る為に領主と農民が一体となり、戦いが始まると退避する城が、石神城になり築かれた。この城址を大事に後世に残したいと思います。



池ノ上遺跡発掘現場

土偶とは何だろう

影山 稔

土偶とは、縄文時代に作られた素焼きの土人形のことであるが、制作目的については諸説がある。土偶は女性像、特に妊婦像が多いことから、自然の恵みの豊穡と安産の祈願のために、さらに、故意に壊された状態で出土することが多いことから、土偶を壊すことで災厄を祓い、生命再生など呪術的儀礼のために作られた、とする説が一般的である。

土偶は集落跡から多く出土しており、縄文人の日常生活の中で作られ、用いられたと考えられる。おそらく、狩猟採集生活で自然の中に精霊の存在を感じ取り、土偶を作ることによって祈願の表現としたのであろう。



村指定文化財 土偶 御所内貝塚出土

後の古墳時代の埴輪は権力者の墓のための制作であり土偶とは目的が異なる。村内、御所内遺跡の女性像土偶は完全な姿で出土した貴重な例であり、縄文人のおおらかに生きる力が伝わってくるようである。



まぼろしの村松軌道

飛田 公子

今から96年前、大正15年(1926)軌道幅762mmの小さな蒸気機関車(B型ボトムタンク)が客車を二両連結して石神駅から阿漕までの4km、十三詣りの参詣者に乗せて、菜の花の咲く原野を「ピョウウー」と可愛らしい汽笛を鳴らして走っていました。これが村松軌道です。SLファンにとって

駅西口開発で専務の子孫の根本宅を解体作業中に、なんと村松軌道の線路の鉄骨が発見されたのです。時代を超えたロマンを感じます。今でも百塚地区JR線路下に村松軌道跡があります。歩いて思いを馳せてはいかがでしょうか。

は、たまらない魅力です。社長は高柳某氏。専務は根本秀之介氏。資本金5万円で村松軌道(株)が設立されました。大いに賑わっていました。大いたが4kmの短区間であり、参詣者も縁日中心。

しだいに経営不振となり、昭和2年3月、わずか3年間で廃業となりました。残念です。この村松軌道に関する資料はほとんど残っていません。本当にまぼろしの軌道です。ところが、令和元年、東海



村松軌道跡

歴史と未来の交流館 令和3年度活動状況

■展示

展示室1		展示室2	企画展
水辺のムラの風土	体験・体感エリア (まる博マルシェ)		
7月～8月 文化的景観「夏」	7月～8月 展示storyマルシェ	通年 人々が紡ぐ東海村の物語	7月～10月 東海村時空マップ
9月～11月 文化的景観「秋」	9月～11月 収穫祭	トビックス展示(村人の物語) 7月～11月 光園と東海村	12月～3月 冬の暮らしの今昔
12月～2月 文化的景観「冬」	12月～2月 遺跡	12月～5月 村松白根遺跡の集団移転	
3月～5月 文化的景観「春」	3月～5月 東海村の未来予想図 大★博覧会		

■とうかいまるごと博物館 ※詳細は次頁のとおり。

- 講座…77講座 (うち14講座中止・延期) / 通年実施
参加者数 約15,000人 (夏休み展示storyマルシェ約1,800人、J-PARCオンライン施設公開約12,000人)

(主な内容)

交流館主催 37講座	まる博マルシェ関連…展示storyマルシェ、脱穀体験、ドングリ拾い、ドングリアート、月見をしよう、ミニ縄文土器づくり、勾玉づくり、クリスマスマルシェ、古墳巡り、アングリン編みでコースターづくり、化石発掘体験ほか 展示解説ツアー(縄文編・自然編・古墳編・古文書編) バックヤードツアー 博物館長と歩く植物観察会 7回 開館記念講演会 「彫刻家山崎望と東海村」「民俗学者藤田稔と東海村」「昆虫研究者廣瀬誠と東海村」
まる博セミナー 5講座 (中央公民館主催)	東海村のキノコ、東海村の砂防林の歴史、オオウメガサソウの不思議な生態ほか
協力団体主催 25講座	東海村の環境調べ隊…探鳥会、磯の生き物観察会、虫博士、天体観測会、キノコ観察会、作って学ぶ「ハニワ」、石を調べよう J-PARC…ハローサイエンス12回、J-PARC施設オンライン公開
他講座 10講座	健康増進課…すこやかウォーキング5回、親子でみそ作り体験

- まる博研究員養成講座
・第2期生修了(10人、17講座受講) ※コロナの影響によりR2年度から2か年で実施
・専門講座実施(5人、「東海村の遺跡調査団・古墳時代の石材調査」、「博物館長と歩く植物観察会～東海村の植物図鑑を作ろう」)
- 『まる博ジャーナル』刊行

■とうかい子どもキャンパス

- 28講座(約70回) ※1講座中止 / 7月～実施 / 受講者数518人

(主な内容)

理科活動専門員とアドバイザー 18講座	のぶちゃん先生の理科ちゃん教室、のぶちゃん先生の詳しくはwebで!、交流館サイエンスショーと…ほか
東海村高校生会 3講座	ものづくり教室、バルーンアート教室
おもちゃグリニッグとうかい ほか 7講座	子ども科学教室、放射線検出器で宝物ゲット(原子力学会)、クリスマスハーバリウム(鈴木ハーブ研究所)、プログラミング体験(常陸STEM教育研究推進会)、マグカップ制作(いちご窯)

■ジョイント授業

- 14回実施(村内小学校5校 / 1年～6年)、840人参加

(主な内容)

承認型 (交流館見学・体験)	生活科「あまとなかよし」シャボン玉あそび、木の突ピンゴ(1年)
	生活「あまとなかよし」松ぼっくりツリー作り、図書館探検(1・2年)
	生活「まち探検」(2年)
	社会「市の様子と人々の暮らしの移り変わり」(3年)
	総合「歴史発見!東海村」学校事前レクチャー、交流館見学、成果発表(6年)
出前型	総合「職場体験」学芸員(土器洗い)体験、理科活動体験(6年)
	総合「村松小学校の環境政策課になろう!～わたしたちができることから～」(5年)
	総合「水辺の生き物観察会」新川自然観察会(4年)
Vモード型	総合「環境政策課になろう」 村松小～交流館～絆北側緑地～村松小自然観察会(5年)
	総合「地域の歴史を知ろう～熊沼家住宅～」熊沼家住宅解説(6年)
	社会「市の様子と人々の暮らしの移り変わり」(3年)

■団体利用

視察・見学 19件申込(うち2件中止)	村内:12団体	村外:7団体
会場利用 4件	児童絵画作品展(東海ライオンズクラブ)、美術作品展(アートロード)、PTA連絡協議会、イルミネーション(村商工会青年部)	

令和3年度とうかいまると博物館実績

	テーマ	日にち	場 所	ジャンル	人数	主催者
1	ハローサイエンス身近な「サイエンスで学ぶ加速器のしくみ」	4月23日	アイヴィル	科学	17	J- PARCセンター
2	みんなですこやかウォーキング	5月7日	村立図書館西側(ふれあいの森公園)集合	健康	30	健康増進課
3	ハローサイエンス「鏡・新型ニュートリノ出現か?」	5月28日	アイヴィル	科学	16	J- PARCセンター
4	みんなですこやかウォーキング	6月4日	石神コミセン集合	健康	中止	健康増進課
5	ハローサイエンス「量子でひもとくタンパク質の「かたち」と「はたらき」	6月25日	アイヴィル	科学	18	J- PARCセンター
6	磯の生き物観察会	7月11日	平磯海岸	自然	46	東海村の環境調べ隊
7	星の雑木林の虫の観察会	7月25日	真崎コミセン	自然	42	東海村の環境調べ隊
8	虫博士	7月28日	図書館交流スペース	自然	45	東海村の環境調べ隊
9	ハローサイエンス「ミュオンで見る」	7月30日	アイヴィル	科学	21	J- PARCセンター
10	夜の雑木林の虫の観察会	7月31日	真崎コミセン	自然	38	東海村の環境調べ隊
11	展示storyマルシェ	7月31日~8月31日	歴史と未来の交流館マルシェスペース	展示	1,822	生涯学習課
12	作って学ぶ「はにわ」	8月3日	中央公民館	歴史	48	東海村の環境調べ隊
13	博物館長と歩く植物観察会	8月11日	歴史と未来の交流館集合	自然	13	生涯学習課
14	石を調べよう3	8月12日	中央公民館	自然	35	東海村の環境調べ隊
15	夏の天体観測会	8月22日	真崎コミセン	自然	中止	東海村の環境調べ隊
16	博物館長と歩く植物観察会	8月25日	歴史と未来の交流館集合	自然	中止	生涯学習課
17	ハローサイエンス「J-PARC Main Ring アップグレード計画」	8月27日	アイヴィル	科学	13	J- PARCセンター
18	みんなですこやかウォーキング	9月3日	総合福祉センター「絆」集合	健康	中止	健康増進課
19	東海村及び日立市周辺の石の特徴	9月11日	中央公民館会議室4・5		中止	公民館
20	博物館長と歩く植物観察会	9月18日	歴史と未来の交流館集合	自然	中止	生涯学習課
21	ハローサイエンス「ニュートリノをたくさん作って調べる」	9月24日	アイヴィル	科学	24	J- PARCセンター
22	国内初の国立結核療養所「村松晴嵐荘」の歴史	9月25日	中央公民館会議室4・5	歴史	中止	公民館
23	みんなですこやかウォーキング	10月1日	白方コミセン集合	健康	中止	健康増進課
24	東海村のキノコ	10月2日	中央公民館会議室4・5	自然	24	公民館
25	博物館長と歩く植物観察会	10月2日	石神城址	自然	9	生涯学習課
26	キノコ観察会	10月3日	笠松運動公園	自然	40	東海村の環境調べ隊
27	東海村の砂防林の歴史	10月9日	中央公民館会議室4・5	歴史	24	公民館
28	脱穀体験(ガーコン・唐箕)	10月10日	歴史と未来の交流館 屋外広場	歴史	17	生涯学習課
29	親子でドングリ拾い	10月16日	白方公園	自然	12	生涯学習課
30	大人の木の实拾い	10月20日	石神城址	自然	1	生涯学習課
31	エネルギーの話	10月23日	中央公民館会議室4・5		中止	公民館
32	親子でドングリ拾い②	10月23日	白方公園	自然	0	生涯学習課
33	ハローサイエンス「水素を見つける中性子」	10月29日	アイヴィル	科学	19	J- PARCセンター
34	ドングリで可愛いアートを作ろう	11月3日	歴史と未来の交流館 活動室1・2	自然	10	生涯学習課
35	カラフルどんぐりを作ろう	11月3日	歴史と未来の交流館 交流スペース	自然	71	生涯学習課
36	みんなですこやかウォーキング	11月5日	真崎コミセン集合	健康	26	健康増進課
37	博物館長と歩く植物観察会「紅葉する樹木」	11月6日	歴史と未来の交流館	自然	10	生涯学習課
38	彫刻家山崎猛と東海村	11月7日	歴史と未来の交流館 活動室1・2	芸術	30	生涯学習課
39	展示解説ツアー(縄文編)	11月7日	展示室1・2	歴史	5	生涯学習課
40	天体観測会	11月13日	総合福祉センター	自然	52	東海村の環境調べ隊
41	J-PARCオンライン施設公開2021	11月13日	オンライン	科学	12,225	J- PARCセンター
42	月見をしよう	11月20日	交流館広場	自然	12	生涯学習課
43	交流館サイエンスショーと…	11月20日	交流館活動室&交流スペース	科学	17	生涯学習課 青少年担当
44	ハローサイエンスK中間子でひもとく物質と反物質の性質の違い	11月26日	オンライン・オンサイト併用	科学	26	J- PARCセンター
45	みんなですこやかウォーキング	12月3日	舟石川コミセン集合	健康	22	健康増進課
46	ヘルスメイトジュニア事業「親子でみそ作り体験」	12月4日	石神コミュニティセンター	健康	13	健康増進課
47	博物館長と歩く植物観察会「杉・ヒノキ植林内の植物」	12月4日	舟石川コミュニティセンター	自然	10	生涯学習課
48	ミニミニ縄文土器づくり	12月4日	交流館マルシェスペース	歴史	18	生涯学習課
49	探鳥会	12月5日	未定	自然	26	東海村の環境調べ隊
50	展示解説ツアー(自然編)	12月5日	展示室1・2	自然	3	生涯学習課
51	化石からわかること	12月18日	展示室1・2	自然	中止	中央公民館
52	勾玉づくり体験	12月18日	歴史と未来の交流館 活動室1・2	歴史	23	生涯学習課
53	クリスマスマルシェ	12月18日	歴史と未来の交流館 交流スペース		50	生涯学習課
54	ハローサイエンスついに稼働するミュオンHライン	12月24日	オンライン・オンサイト併用	科学	16	J- PARCセンター
55	みんなですこやかウォーキング	1月7日	村松コミセン集合	健康	中止	健康増進課
56	博物館長と歩く植物観察会「落葉樹の冬芽」	1月8日	歴史と未来の交流館	自然	11	生涯学習課
57	展示解説ツアー(古墳編)	1月9日	展示室1・2	歴史	6	生涯学習課
58	バックヤードツアー	1月10日	収蔵庫3	歴史	6	生涯学習課
59	古墳巡り(中道前古墳群・石神小学校前集合)	1月15日	石神小学校駐車場集合	歴史	13	生涯学習課
60	探鳥会	1月16日	阿漕ヶ浦公園	自然	25	東海村の環境調べ隊
	月見をしよう(リベンジ)	1月16日	歴史と未来の交流館 駐車場	自然	10	生涯学習課
61	考古学者茂木雅博と東海村発掘調査史	1月23日	歴史と未来の交流館 活動室1・2	歴史	延期	生涯学習課
62	ハローサイエンス「鏡・ニュートリノをたくさん作って調べる」	1月28日	オンライン・オンサイト併用	科学	21	J- PARCセンター
63	みんなですこやかウォーキング	2月4日	総合福祉センター「絆」集合	健康	26	健康増進課
64	博物館長と歩く植物観察会「冬越しする植物」	2月5日	歴史と未来の交流館集合	自然	7	生涯学習課
65	アンギン編みでコースターづくり	2月5日	交流館マルシェスペース	歴史	11	生涯学習課
66	探鳥会	2月6日	阿漕ヶ浦公園	自然	29	東海村の環境調べ隊
67	展示解説ツアー(古文書編)	2月6日	展示室1・2	歴史	7	生涯学習課
68	民俗学者藤田稔と東海村	2月20日	歴史と未来の交流館 活動室1・2	歴史	40	生涯学習課
69	ハローサイエンス「陽子ビームで探る高エネルギー核反応」	2月25日	オンライン・オンサイト併用	科学	22	J- PARCセンター
70	みんなですこやかウォーキング	3月4日	総合福祉センター「絆」集合	健康	29	健康増進課
71	博物館長と歩く植物観察会「休耕田」	3月5日	歴史と未来の交流館	自然	9	生涯学習課
72	化石発掘体験(子供向け)	3月6日	真崎浦	自然	15	生涯学習課
73	オオウメガサソウの不思議な生態	3月8日	中央公民館会議室4・5	自然	11	中央公民館
74	昆虫研究者廣瀬誠と東海村	3月13日	歴史と未来の交流館 活動室1・2	自然	47	生涯学習課
75	展示解説ツアー(化石編)	3月19日	展示室1・2	自然	中止	生涯学習課
76	ハローサイエンス「宇宙にあるのか“ハイパー原子核”」	3月25日	オンライン・オンサイト併用	科学	26	J- PARCセンター
77	化石クリーニングライブ	3月28日	資料調査室前	自然	中止	生涯学習課

計 15,410

協力団体を紹介します!



クモ博士と
虫の観察会

東海村の環境調べ隊 (代表：林 京子さん)

様々な専門の先生方と磯の生き物観察会や、キノコ観察会、天体や野鳥の観察会などを行っています。
転入転出村民が多い東海村ですが、今ここで生活する子ども達は東海村がふるさとです。コロナでどこにも行けない毎日ですが、身の回りの自然や文化を知ること、より豊かで楽しい時間を持てれば良いと思います。

参加団体・企業を大募集!

- 対象事業：歴史・民俗・文化・科学・自然・郷土を題材とした講座・見学会・体験・イベント
- 対象事業例：ハローサイエンス (J-PARC主催)、天体観測会 (東海村の環境調べ隊)、すこやかウォーキング (健康増進課) など
- 登録方法：事業名と内容、時期を明記の上、担当までメールでご連絡ください。
また、不明点等ありましたら担当まで遠慮なくお問い合わせください。
- 申込・問合せ先：教育委員会生涯学習課博物館・文化財担当 (歴史と未来の交流館内)
電話：029-287-0851 電子メール：maruhaku@vill.tokai.ibaraki.jp



健康づくり計画推進委員が中心となり、村内のヘルスロードを楽しくウォーキングしました。ヘルスメイトジュニア事業では、親子で味噌づくりにチャレンジし、郷土料理や減塩について楽しく学びました。



中央公民館

まる博ゼミナールは座学でアカデミーの内容を深めながら、同時にまる博事業での現地での体験や観察をさらに興味や知識を深めるきっかけとなっています。

東海村の
キノコ





のぶちゃん先生 with
理科活動アドバイザーの
交流館実験ショー

生涯学習課青少年担当

まる博での青少年担当は、科学分野を中心に展開しています。子どもたちに伝わりやすいように、身近な現象やモノを題材として講座を展開しています。



とうかいまるごと博博物館への

とうかいまるごと博物館とは、村内全域を博物館空間と捉え、多様な主体が企画する村内で行われる様々なイベントや講座などの活動を「まる博」でつなげる取り組みです。

「まる博」事業に登録すると、登録事業をまとめたリーフレットに掲載され、村内外に周知されます。

事業を内外にPRでき、さらなる参加者の増加が見込まれます。東海村で講座やイベント・体験などを計画されている事業者の皆様、ぜひとうかいまるごと博物館へご参加ください。

J-PARCセンター

2016年12月から始めた「J-PARCハローサイエンス」は、これまでに58回開催しました。これからも毎月1回開催します。研究者とサイエンスについて語り合うひと時をお過ごし下さい。施設公開もお楽しみに。

ハローサイエンス
の様子



健康増進課

すこやか
ウォーキングの
様子





まる博ジャーナル

発行 令和4年3月31日

発行者 東海村教育委員会(東海村歴史と未来の交流館)

所在地 茨城県那珂郡東海村村松768番地38

印刷 大富印刷株式会社